—和歌山県内文化財調査報告会資料集—

地宝のひびき

平成26年(2014)7月13日(日)

公益財団法人 和歌山県文化財センター

開催にあたって

和歌山県は山と海に囲まれたいくつかの平野部に分かれ、地域性豊かな風土を育んできました。「地宝のひびき」はそんな和歌山県内の各地に分布する埋蔵文化財や史跡等の文化財に関する調査成果を、各現場担当者が皆様にいち早く伝える場として開催してまいりました。本年度は、2013 年度に行われた５件の発掘調査のほか、文化財建造物の保存修理について紹介します。

５件の発掘調査の対象地は和歌山市が３件、橋本市と御坊市が１件ずつで、いずれも紀伊国の発展を支えてきた地域の中心地の調査成果です。和歌山市鷺ノ森遺跡と橋本市東家遺跡、御坊市小松原Ⅱ遺跡では、弥生時代前後に始まった集落が古墳時代・古代に発展し、中世・近世には城館や屋敷が形成される様相がうかがわれ、現在の市街地の地下に眠る歴史の変遷を知る興味深い調査となりました。また、海南市長保寺では国宝の建造物群で葺かれた瓦の調査が行われており、製作や転用状況について興味深い成果となっています。

当報告会の開催にあたっては、多数の関係諸機関や県内の調査担当者にご協力いただきました。記して感謝の意を表したいと思います。この報告会が和歌山県内各地の歴史や地域性に触れる良い機会となるとともに、文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

平成 26 年 7 月 13 日

公益財団法人　和歌山県文化財センター

理事長　工　楽　善　通

開催日程

12：30　開　　場

13：00　開会挨拶

13：05　「古墳時代から江戸時代にかけての調査
　　－戦国時代の濠跡を中心に　和歌山市鷺ノ森遺跡－」
（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団　井　馬　好　英

13：40　「武家屋敷群の風景を復元する－和歌山城跡の発掘調査成果－」
（公財）和歌山県文化財センター　高　橋　智　也

14：15　「和歌山県下初の埴輪窯発掘－和歌山市平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査－」
（公財）和歌山県文化財センター　山　本　光　俊

14：50　休　　憩

15：00　「東家遺跡・東家館跡の発掘調査」
橋本市教育委員会　大　岡　康　之

15：35　「小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査」
（公財）和歌山県文化財センター　川　崎　雅　史

16：10　「長保寺における修理と瓦の調査」
（公財）和歌山県文化財センター　下　津　健太朗

16：45　閉会挨拶

開催日時　平成 26 年 7 月 13 日（日）13：00 ～ 16：45
会　　場　きのくに志学館（和歌山県立図書館２階）　講義研修室
　　和歌山市西高松一丁目７－38

主　　催　公益財団法人和歌山県文化財センター
後　　援　和歌山県教育委員会、和歌山市教育委員会、橋本市教育委員会、御坊市教育委員会、
　　公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団、一般社団法人和歌山県文化財研究会

目　次

■ 日　　程 …… 3

■ 報告対象遺跡等の位置と時代 …… 5

■ 発　　表 …… 6

Ⅰ　古墳時代から江戸時代にかけての調査　ー戦国時代の濠跡を中心に　和歌山市鷺ノ森遺跡ー
公益財団法人　和歌山市文化スポーツ振興財団　井　馬　好　英…… 6

Ⅱ　武家屋敷群の風景を復元する　ー和歌山城跡の発掘調査成果ー
公益財団法人　和歌山県文化財センター　高　橋　智　也…… 12

Ⅲ　和歌山県下初の埴輪窯発掘　ー和歌山市平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査ー
公益財団法人　和歌山県文化財センター　山　本　光　俊…… 18

Ⅳ　東家遺跡・東家館跡の発掘調査
橋本市教育委員会　大　岡　康　之…… 24

Ⅴ　小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査
公益財団法人　和歌山県文化財センター　川　崎　雅　史…… 30

Ⅵ　長保寺における修理と瓦の調査
公益財団法人　和歌山県文化財センター　下　津　健太朗…… 36

■ 誌　上　発　表 …… 42

1　「史跡和歌山城第 36 次発掘調査　ー二の丸大奥・中庭の調査ー」
公益財団法人　和歌山市文化スポーツ振興財団　北　野　隆　亮…… 42

2　「弥生時代中期から奈良時代の微高地上の居住域　ー和歌山市和田遺跡の第 2 次発掘調査ー」
公益財団法人　和歌山県文化財センター　佐　伯　和　也…… 44

3　「井辺遺跡の調査と景観復元　ー井辺遺跡第 34 次調査からー」
公益財団法人　和歌山市文化スポーツ振興財団
藤　藪　勝　則・福　佐　美智子…… 46

4　「田屋遺跡第 18 次発掘調査成果」
公益財団法人　和歌山市文化スポーツ振興財団　菊　井　佳　弥…… 48

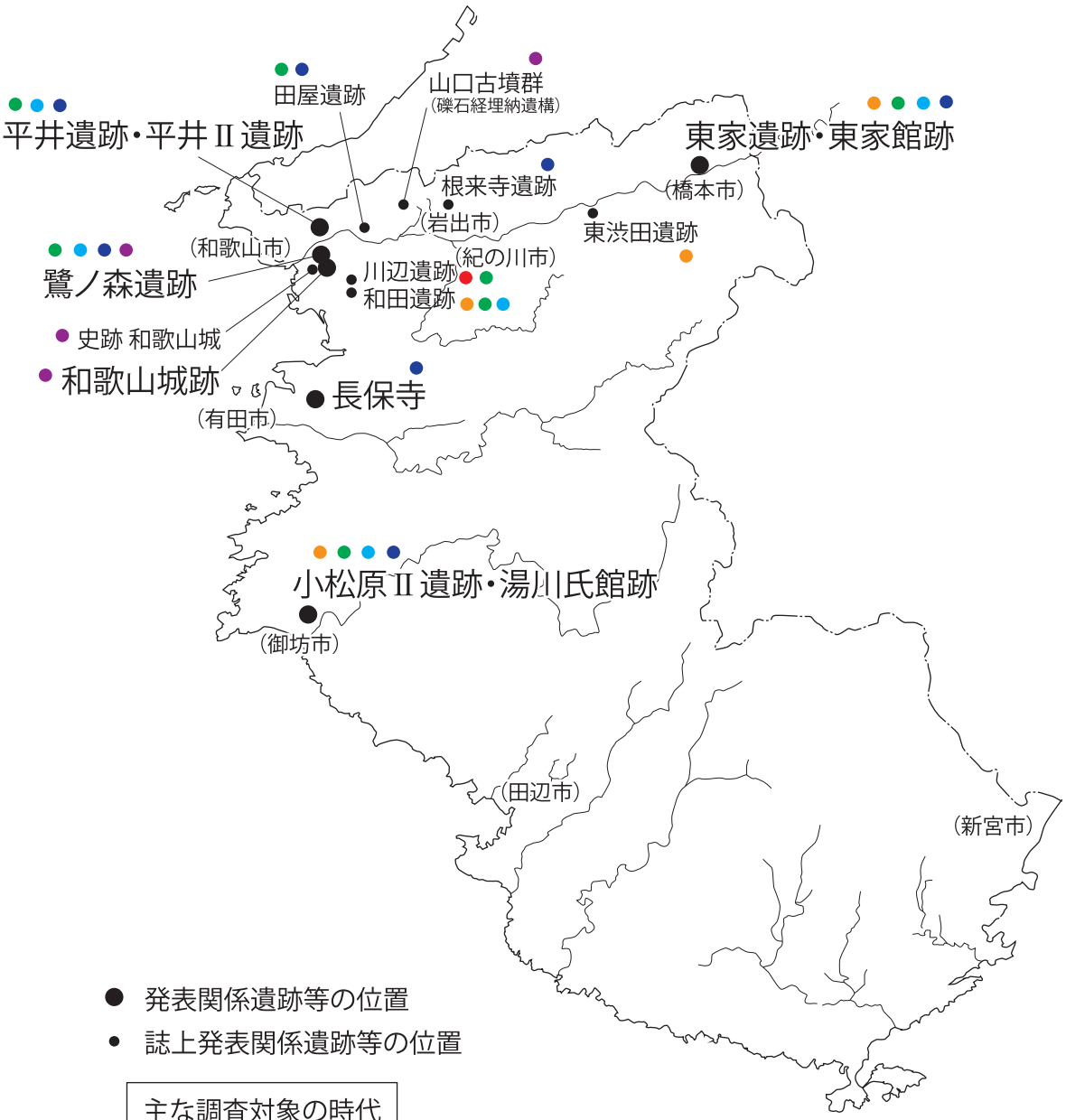
5　「山口古墳群における礫石経埋納遺構について」
公益財団法人　和歌山県文化財センター　村　田　　弘…… 50

6　「根来寺遺跡の発掘調査」
公益財団法人　和歌山県文化財センター　寺　西　朗　平…… 51

7　「東渋田遺跡の発掘調査」
公益財団法人　和歌山県文化財センター　村　田　　弘…… 53

1．本書は平成 26 年度に公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した「地宝のひびき―和歌山県内文化財調査報告会―」の発表資料集である。
2．本書掲載資料は正式な報告書が未刊行のため、今後、各資料の位置付けが変更される可能性がある。
3．本書の編集は丹野拓が担当し、寺西朗平が補佐した。

報告対象遺跡等の位置と時代



● 発表関係遺跡等の位置

• 誌上発表関係遺跡等の位置

主な調査対象の時代

- 縄文時代の遺跡調査
- 弥生時代の遺跡調査
- 古墳時代の遺跡調査
- 古代の遺跡調査
- 中世の遺跡調査
- 近世の遺跡調査

古墳時代から江戸時代にかけての調査

―戦国時代の濠跡を中心に　和歌山市　鷺ノ森遺跡―

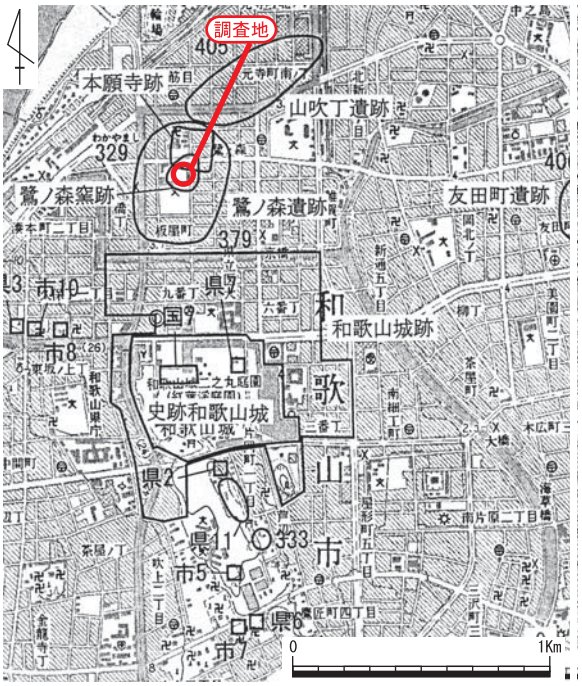
公益財団法人　和歌山市文化スポーツ振興財団　井馬　好英

1．はじめに

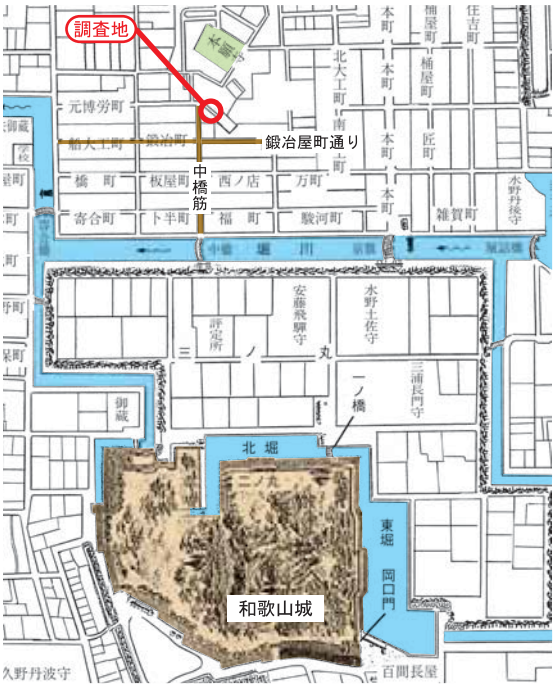
鷺ノ森遺跡は、紀ノ川下流域南岸の和歌山平野ほぼ中央部に位置し、弥生時代から江戸時代にかけての遺物が出土する散布地として周知されている。この遺跡は、国の史跡である和歌山城の北約１㎞に位置する浄土真宗西本願寺派である鷺森別院の周辺に広がる遺跡で、遺跡内には奈良時代から平安時代にかけての鷺ノ森窯跡及び中世末期に真宗の道場として開かれた鷺森（雑賀）御坊に由来する本願寺跡が重複して存在する。当遺跡ではこれまで 12 次にわたる調査が行われ、現在でも調査が継続中である。

今回の調査対象地は和歌山市立城北小学校の敷地内にあたり、学校建設に伴う約３年計画の第１期発掘調査（第８次調査）として開始したものであり、平成 24 年 10 月 25 日から平成 25 年８月 30 日までの９ヶ月間の期間で約 630 ㎡の調査を行った。

今回の発掘調査と関連深い調査としては、平成４年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行った当調査地北側の城北公園地下駐車場建設に伴う調査（第３次調査）がある。この調査では４面にわたる江戸時代の生活面の調査を行い、大規模な下水道遺構や道路遺構、礎石建物を構成する基礎遺構、鍛冶屋町を象徴する鍛冶関連遺構やカマド、井戸、便所など多数の遺構を確認するとともに膨大な量の遺物が出土している。



第１図　遺跡分布図



第２図　和歌山城下町図《安政２年（1855）より》

2. 調査成果

今回の調査（現地表面の標高は約 3.50 m）では、まず地表下 50 ㎝の深さで江戸時代末期以降の生活面を確認した。また最下面の古墳時代から飛鳥時代にかけての遺構面は地表下 2.5 mの深さにあり、全体を通して６面の遺構面の調査を行った。第１～３面は江戸時代の生活面で整地によって生活面の床上げを行っている。第４遺構面は戦国時代から江戸時代初頭の時期で、大規模に掘削された濠跡を確認した。また、さらに下層の第５遺構面は鎌倉時代を中心とする時期で石組み井戸などを確認し、第６遺構面は古墳時代から飛鳥時代の時期で、竪穴建物や掘立柱建物などの遺構を検出した。

〔第１遺構面検出の遺構〕

第１遺構面は第５層上面で検出したもので、北端部では標高 3.00 m、南端部で標高 2.45 mとなり、南に向かって緩やかに下降する傾斜をもつ。検出した遺構は、江戸時代末期から明治時代にかけての大規模に掘削された土坑２・８・54 や瓦を廃棄した土坑 46・62、内部に埋桶の痕跡が２ヶ所確認できた土坑 41、戦後すぐに埋められた井戸１などを検出し、また南端部で土管を埋設した道路１を確認した。井戸１（写真１）は井戸瓦を使用したもので、井戸瓦を３段分検出し、その下部に埋桶を埋設したもので、内部からは太平洋戦争時の瓦が多数出土した。井戸の掘方には江戸時代の遺物のみが含まれていることから、幕末頃に構築され戦前まで使用されていたものと考えられる。また数多く確認した土坑は、深掘されたものが多く、壁土などに使用する良好な土壌を採掘した後、瓦や破損した陶磁器などを廃棄したものと考えられる。道路１は東西方向のもので、真北から 75°西に傾く方向性をもち、道幅は１間半（約３m）とみられる。この時期の特殊な遺物としては「紀州忍冬酒」と彫り込まれた大谷焼の徳利（写真２）があり、江戸時代後期に描かれた『紀伊国名所図会』にもその記載がみられる。

〔第２遺構面検出の遺構〕

第２遺構面は、調査区全域の第６層上面（標高 2.30 ～ 2.75 m）において確認したもので、建物１や根固め状の土坑で構成する礎石列２や井戸５基（井戸２～５・７）、桶を埋設した土坑 100 の他、瓦などを廃棄した土坑 89・106・107・122・174・181 など多数の遺構を検出した。建物１は道路１の南側で検出した礎石列で構成するもので、規模等は不明であるものの、その方向性は、道路１に平行する。礎石列２は、南北方向に軸をもつ砂岩の円礫などを土坑内部に密に敷き詰めたもので、方向性は建物１に類似する。井戸では、その内部構造に井戸瓦を使用したものが多く、最下部には桶を埋設する構造である。これらの遺構は、18 世紀後半以降とみられる。

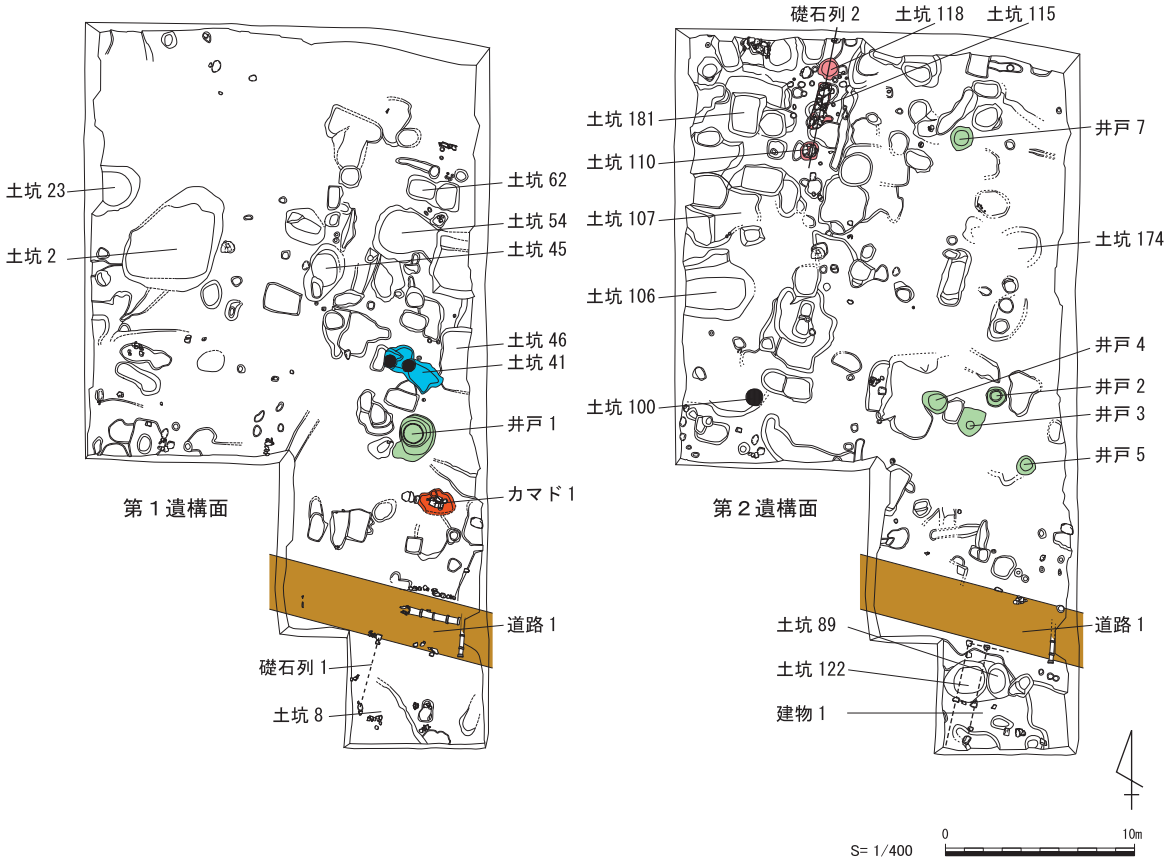
〔第３遺構面検出の遺構〕

第３遺構面は、調査区全域の第７層上面（標高 2.15 ～ 2.50 m）において確認した。遺構は、調査区中央部で礎石列３や南端部で礎石列４、中央部でカマド 2、北端部で井戸６の他、大規模な廃棄土坑（土坑 90・210・219）などを検出した。礎石列３・４は道路１に平行もしくは直交する方向性で並ぶ。カマド２は壁面の下部に粘土を、上部には瓦片を用いて直径 1.1 mの円形状に構築し、底部には平瓦と結晶片岩を敷き詰めたもので、内部の堆積には炭を含む堆積が確認できた（写真３）。また井戸６は直径 2.0 mの掘方と直径 0.9 mの井戸枠の部分を検出したもので、2.5 mの深さ（標高 0 m）まで掘削したものの、内部構造については確認できていない。これらの遺構は、17 世紀後半から 18 世紀中葉頃のものである。

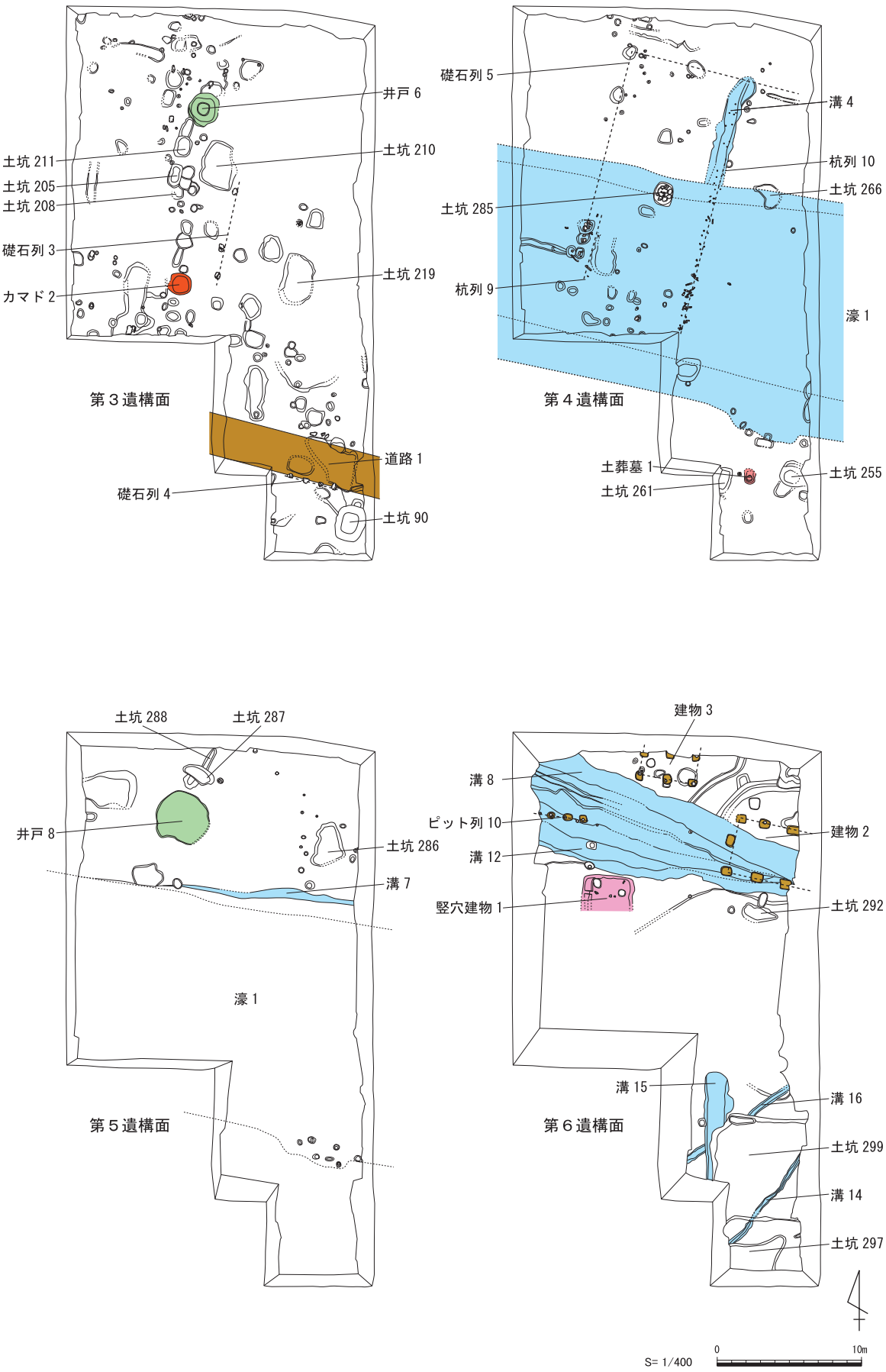
〔第４遺構面検出の遺構〕

第４遺構面は第８層上面で検出したもので、北端及び南端部では標高 1.80 mでほぼ水平であるものの、中央部に存在する濠１の部分が谷状に５㎝程度低くなっている。遺構は、北半部を中心として江戸時代前期の礎石列５を検出した。

濠１（写真５）は当初自然流路と考えて調査に至ったもので、その規模は上端幅 17 m、下端幅 10 m、深さ 2.5 mであり、その方向性はN－82°－Wである。覆土は大きく８単位（写真６）に分けられ、第７層の掘削後、湧水が著しく最下層である第８層の掘削は第６遺構面終了後にできる範囲で行った。特に、中位層である第４層を中心として漆器や下駄などの木製品や獣骨や魚骨・貝がらなどの自然遺物が多量に出土した。また土器類では備前焼などの国産陶器をはじめ、中国製の染付碗・皿や白磁皿など（写真７）が一定量出土している。遺物からみて、最下層の時期が 16 世紀代とみられることから、16 世紀になって掘削された大規模な濠である可能性が高まった。そして、17 世紀の初頭には人為的に埋められ、その上部に建物を構築するため２条の基礎杭（杭列９・10）が数多く打ち込まれていることも判明した。基礎杭の方向性は、N－15°－Eであり、上面の礎石建物３の方向性に合致する。この他、北半部で確認した途中で途切れる溝４は礎石建物より古い時期のもので、濠１に排水する目的で掘削された溝と考えられる。この他、南端部では上半部の人骨が出土した土葬墓１や備前焼の大甕が廃棄されていた土坑 261 などがある。



第３図　主要遺構配置図（第１・２遺構面）



第４図　主要遺構配置図（第３～６遺構面）

〔第５遺構面検出の遺構〕

第５遺構面は、調査区全域の第９層上面（標高 1.40 ～ 1.55 m）において確認したもので、鎌倉時代とみられる石組井戸１基（井戸８）、東西方向の溝７などを検出した。井戸８（写真 4）は上部を結晶片岩の割石と砂岩の河原石で円形に小口積みしたもので、基底部には桶を埋設している。上端部の規模は直径 80 ～ 90 ㎝、深さは検出面から 1.8 mで、埋桶は直径 65 ㎝、高さ 80 ㎝である。

〔第６遺構面検出の遺構〕

第６遺構面は、調査区全域の第 10 層上面（標高 0.70 ～ 0.95 m）において確認したものである。遺構は、北端部で古墳時代前期の溝８・12 や飛鳥時代の竪穴建物１と掘立柱建物２棟（建物２・３）、ピット列 10 などを検出した。また南端部では南北方向の溝 14 ～ 16 や大規模な土坑 297・299 を検出した。竪穴建物１は南半部を濠１によって削り取られたもので、東西 3.5 m、南北 2.0 m以上、深さ 30 ㎝程度の比較的規模の小さなものである。この建物の床面周辺からは７世紀初頭頃の須恵器や土師器の他、滑石製勾玉や臼玉が出土した。掘立柱建物では側柱の建物２や総柱の建物３があり、竪穴建物１と同時期と考えられる。また溝８は、幅 2.9 m、深さ 60 ㎝のもので、N－67°－Wの方向性で直線的にのびる。その流路方向は底面の標高差からみて、東から西とみられる。また溝 12 は溝８と重なりあって検出したもので、溝８よりも古い時期のものである。

3. まとめ

今回の調査では６面の遺構面を調査し、各遺構面において重要な成果を得た。なかでも地表下 2.5 mの飛鳥時代を中心とする時期に竪穴建物や掘立柱建物が存在し、居住域として位置づけられたことは一つの大きな成果といえる。しかし、最大の成果といえるものは、中世末期の戦国時代に幅 17 mにも及ぶ濠を掘削した勢力の存在であり、その勢力が当調査地北側に存在した雑賀御坊（雑賀衆）に位置づけられることである。濠内部の下層からは、当時着用されていたとみられる鎧の一部（小札）や小刀など（写真８）も出土し、戦国時代の遺物として位置づけられる貴重なものである。そして、雑賀御坊周辺部はほぼ真北に軸をとる城下町中心部とは異なる約 15°東に傾く方向性が踏襲され、戦前までその地割が存在していたことが明らかであり、今回検出した濠の方向性とほぼ合致するものといえる。

以上の調査成果は、紀州の中世史を語る上で欠かせないものと考えられよう。

【参考文献】

『鷺ノ森遺跡第３次発掘調査概報』―城下町和歌山・鍛冶屋町の調査― （財）和歌山市文化体育振興事業団 1992 年

写真１　第１遺構面　井戸１

写真２　大谷焼徳利

写真３　第３遺構面　カマド２

写真４　第５遺構面　井戸８

写真５　第４遺構面　濠１

写真６　第４遺構面　濠１土層堆積状況

写真７　中国製染付碗・皿、白磁皿

写真８　金属製品（鎧片小札・鉄鏃・小刀）

武家屋敷群の風景を復元する
―和歌山城跡の発掘調査―

公益財団法人　和歌山県文化財センター　高橋　智也

現在の検察庁庁舎敷地内で和歌山地方合同庁舎新築の計画があり、その建設予定地に和歌山城跡が存在していることから、平成 25 年 8 月から平成 26 年 3 月にかけて発掘調査を行った。

調査の結果、多様な屋敷地区画施設が発見され、江戸時代における武家屋敷区画のあり方がわかってきた。今後、報告書刊行に向けて調査成果や出土遺物等の整理を進めていく予定であるため、まだまだ不明な点も多いが、現地調査段階でわかってきたことを報告したい。

1. 和歌山城と和歌山城跡

和歌山城の歴史は、羽柴秀吉が紀州を平定した天正 13 年（1585）に始まる。紀州平定後、秀吉が異父弟の羽柴秀長に築城を命じて以後、浅野家の時代を経て、元和 5 年（1619）に徳川家康の十男である頼宣が和歌山城に入城する。頼宣はそれまでの和歌山城を天守郭・本丸を中心として周囲に二の丸・三の丸・砂の丸・西の丸・南の丸を配置した御三家の城郭としてふさわしい城に大改築を行っている。

明治維新後、和歌山城の保存は明治政府により内堀より内側に限られ、内堀と外堀に囲まれた三の丸は官公庁用地としての利用や民間への払い下げが行われた。明治政府により保存が図られた範囲は、昭和 6 年（1931）に国史跡に指定されたが、旧三の丸部分は、往時の姿を残さずに今日に至っている。

現在は、旧三の丸が和歌山城の一部であることから、「和歌山城跡」として埋蔵文化財包蔵地となっている。（図 1）

図 1　調査区の位置

2. 発掘調査成果の概要

ⅰ　3 段階確認された敷地造成

今回の調査では、近世・近代の遺構面が 4 面確認された。時代を経るにつれ土地の嵩上げが行われる状況が確認でき、各段階で大規模な敷地造成を行っていることがわかる。火事や地震等の災害が契機になったか、あるいは拝領地の変更が契機になったのかはわからないが、屋敷地の再整備を行う各段階で 20 ㎝から 30 ㎝程度の造成を行っていることが確認された。（写真 1・図 2）

また、屋敷地区画施設を境に東西の標高が異なることが判明した。これは、周辺地形が西から東へ傾斜しているため、表門の標高に合わせて敷地を平坦にすることに起因すると考えられる。

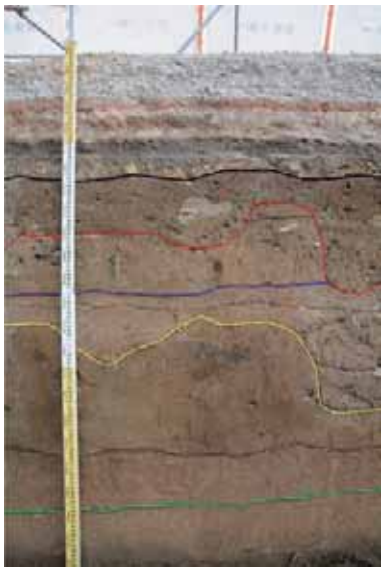


写真 1　土層堆積状況

ii　水琴窟（第 1 遺構面）

土壙に底を穿孔した鉢を伏せ置いた 2 基の遺構を確認した。手水鉢や蹲踞などの関連遺構が残存していないが、その特徴から水琴窟遺構と考えられる。どちらも同じ構造をしているが、水琴窟 1（写真 2）は丹波系陶器の三足鉢、水琴窟 2（写真 3）は堺焼擂鉢を使用している。

写真 2　水琴窟 1（遺構 70）

写真 3　水琴窟 2（遺構 78）

iii　苑池遺構（第 2・3 遺構面）

武家屋敷の庭園にあった苑池跡が 2 か所検出されている。苑池遺構 1（写真 4）は第 2 遺構面、苑池遺構 2（写真 5）は第 3 遺構面であり時期が異なるが、絵図史料の記載から、いずれも安藤家屋敷にあった庭園遺構と考えられる。

写真 4　苑池遺構 1（遺構 212）

写真 5　苑池遺構 2（遺構 437）

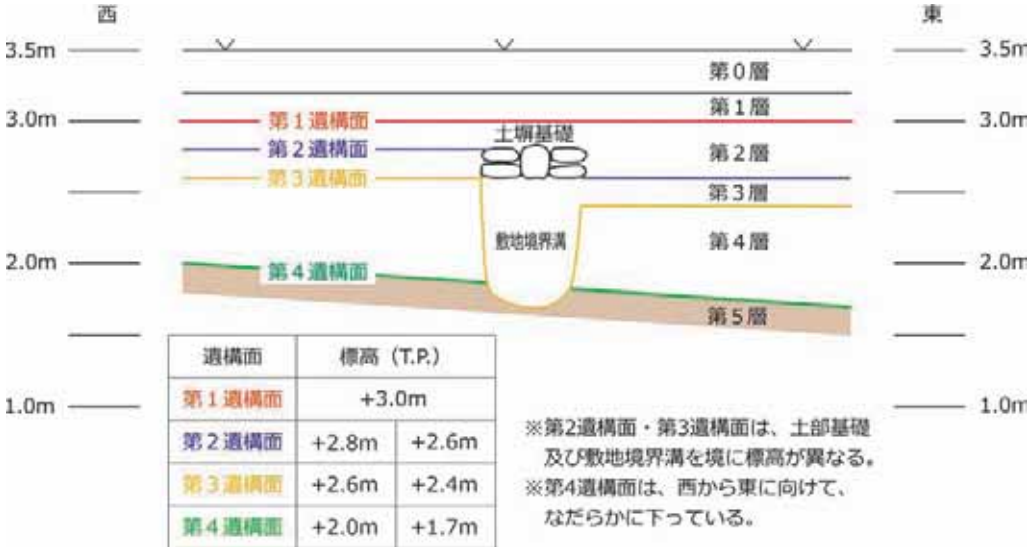


図 2　遺構面標高　模式図

ⅳ　地下式倉庫（第 3 遺構面）

最も大きなもので 8.6 m ×4.0 m、小さなものでも 3.0 m ×1.9 mの巨大な土坑を 3 基確認した。これには底へ降りるための階段状施設（写真 6）や梯子等を取り付けた痕跡（写真 7）が認められることから地下式倉庫と考えられる。

写真 6　地下式倉庫 1（遺構 361）

写真 7　地下式倉庫 3（遺構 451）

ⅴ　屋敷地区画施設（第 2・3・4 遺構面）

屋敷地を区画していたと考えられる施設が多く確認された。いくつかの種類が存在しており、屋敷地を区画していた施設の多様さをうかがわせる。

【土塀】土塀基礎（第 2 遺構面）

幅 0.5 m程度の石を 3 列に敷き並べて、幅 1.4 mの石垣状にした南北方向の石列を確認した。（写真 8）中央の列には比較的平らな砂岩を使用し、両側の列は結晶片岩を使用して石垣状にしている。この状況から、石列上には心柱を持つ土塀があったと考えられる。

写真 8　土塀基礎（遺構 86）

【溝 + 木塀】屋敷地区画溝（第 3 遺構面）

第 2 遺構面の土塀基礎の直下で南北方向の屋敷地区画溝が確認された。（写真 9）溝の東西には等間隔で柱穴が並んでいることから、屋敷地は排水溝を兼ねた屋敷地区画溝で区画され、その溝の両脇に各屋敷が塀を構築していたものと考えられる。また、この溝は締め固められたシルト質の土で充填されている。これは、第 2 遺構面の土塀基礎を構築する際に、土塀が沈下しないように地固めされたものと考えられる。

なお、これと同様の遺構が調査区の西半で東西方向でも検出されている。

写真 9　境界溝 1（遺構 436）

【木塀】屋敷地区画柱穴列（第 3・4 遺構面）

第 3 遺構面で、南北方向の屋敷地区画溝 1 の南側延長上に柱穴列を検出した。屋敷地区画を示す塀（木塀？）の痕跡と考えられる。

また、第 4 遺構面でも南北及び東西方向に延びる同様の柱穴列を検出した。（写真 10）南北方向

は第 2 遺構面の屋敷地区画柱穴列の直下、東西方向は屋敷地区画溝 2 の直下で検出された。第 2 遺構面の柱穴列と同様に、屋敷地区画を示す塀の痕跡と考えられる。

第 4 遺構面の柱穴列は、第 3 遺構面の屋敷地区画と同じ場所を踏襲しているが、東西方向では違った構造の遺構となり、屋敷地区画の施設構造が変わったことを示す良い資料である。

写真 10　柱穴列（遺構 436）

3. 武家屋敷群の風景を考える

今回の調査成果は屋敷地区画施設の変遷を考えるうえで貴重な資料となった。屋敷地内の施設跡も若干ながら検出しているため、武家屋敷群景観について考えてみたい。

i　武家屋敷地の変遷

江戸時代に描かれた絵図史料には、武家屋敷群の配置についての記載がある。これによると、調査区の範囲には多いときで 3 家の武家が居を構えていたことがわかる。17 世紀中頃から 18 世紀前半（*1）に佐野・大高・安藤の 3 家、18 世紀中頃には佐野・安藤の 2 家、19 世紀前半からは佐野の 1 家の屋敷地があった。

このうち、佐野家はキーとなる武家である。佐野家の屋敷地は 17 世紀中頃に検察庁敷地の北東部の一角であったものが、18 世紀中頃にかつての大高家の屋敷地まで広がり、更に 19 世紀中頃に安藤家の屋敷地も吸収して、現在の和歌山地方合同庁舎・検察庁を併せた敷地全体に広がっている。この状況は発掘調査で判明した屋敷地区画施設の構築・廃棄の状況からも傍証できる。目覚ましい出世を遂げ、このころ紀州藩の老中格となっていた武家の屋敷としてふさわしい広さになっていったことがうかがえる。

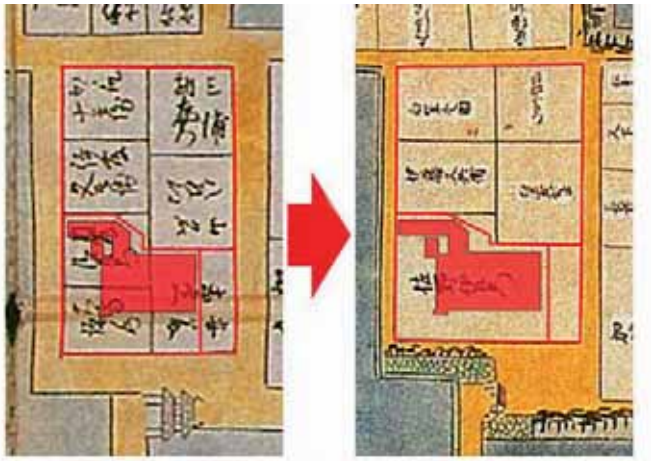


図 3　武家屋敷地区画を示す絵図史料

（*1）和歌山古屋敷絵図（万治元（1658）～寛文元（1661）・和歌山城下屋敷大絵図（宝暦 6（1709）～正徳 4（1714））

（*2）和歌山城下町絵図（享保 20（1735）～延享 2（1742））

（*3）若山御城下図（天保 7（1836）～天保 12（1841））・和歌山城下町絵図（安政 2（1855））・和歌山屋敷絵図（文久 3（1863））

ii　武家屋敷群の風景

武家屋敷の庭園

屋敷地内の庭園の存在を示す遺構として苑池遺構 1 及び苑池遺構 2 を確認した。絵図史料の記載から、双方とも安藤家屋敷内の庭園遺構と考えられる。苑池遺構 2 は規模が大きく、17 世紀中頃から 18 世紀中頃に屋敷裏に大規模な庭園があったことがうかがえる。この苑池は 18 世紀中頃から 19 世紀前半の段階で埋められたようである。その後、苑池遺構 1 が造られるが、これは苑池遺構 2

に比べ規模が小さく、屋敷地の中心にあたる場所に所在することから中庭的性格が考えられる。

安藤家の屋敷地は、19 世紀前半以降になると佐野家の屋敷地に統合され、庭園遺構は、水琴窟が 2 基認められるだけとなる。しかしながら、大正時代の写真をみると佐野家屋敷に該当する場所の南部から東部に林が見え、大規模な庭園であった名残の可能性がある。これが庭園であったなら紀州藩の老中格の佐野家の屋敷としてふさわしい景観であったと考えられる。

地下式倉庫の構造

3 棟の地下式倉庫のうち、2 棟は長辺を東西方向に向け、階段状の入口部を持つ。残りの 1 棟は長辺を南北に向け、梯子状の入口部を持つ。配置や形態が異なっている背景には、その倉庫を造った武家が異なることに起因していると考えられ、その位置から、前者は大高家、後者は佐野家が造ったものと考えられる。ただし、南側に入口部を持つことで共通しているが、おそらく、双方とも暗い倉庫内にできるだけ光を導入する工夫を施したためであろう。

屋敷地区画施設の変遷

今回の調査による最大の成果は、三の丸の一角における武家屋敷地の区画変化や区画に用いられた施設構造について検討する資料が得られたことである。特に、施設構造は絵図史料には記載がなく、発掘調査成果からしか検討することができないことが非常に重要である。

発掘調査成果の概要でも述べたとおり、屋敷地区画施設には木塀・溝・土塀といった構造が推定できる。また、同時期に同構造の屋敷地区画施設が全てに用いられたのではなく、様々な構造が併存していたようである。また、屋敷地を東西に分割する区画施設を例にとれば、表 1 のとおり変化しており、土地の嵩上げに伴う造成が行われるたび、敷地区画が同じ場所であっても施設構造が変化していることがうかがえる。

時　代	区　画　数	区画施設の構造	該当する遺構面
17 世紀前半	3 区画（安藤・大高・佐野）	【木塀】	第 4 遺構面
18 世紀前半	3 区画（安藤・大高・佐野）	【溝 + 木塀】・【木塀】	第 3 遺構面
18 世紀後半	2 区画（安藤・佐野）	【土塀】	第 2 遺構面
19 世紀前半	1 区画（佐野）	屋敷地拡大に伴う区画施設の撤去	第 1 遺構面

表 1　屋敷地区画施設の構造変遷

4. 最後に

ふと疑問に感じたことがある。隣り合う武家のどちらが区画施設を造るのだろうか。

ヒントは施設構造の変遷にあるのかもしれない。18 世紀前半にそれ以前の【木塀】から【溝 + 木塀】に変更された部分は佐野家屋敷の南側・東側であり、また、18 世紀後半に屋敷地を東西に分割する区画施設が【溝 + 木塀】から【土塀】に変わる部分もまた佐野家屋敷の東側である。どちらも佐野家屋敷が関係していることで共通しているのである。

佐野家が目覚ましい栄達を遂げていることを考えれば、当地における区画施設構造の選択には、隣り合う武家の力関係が関係している可能性がある。ただし、この一例だけで判断することは難しく今後の検討課題である。

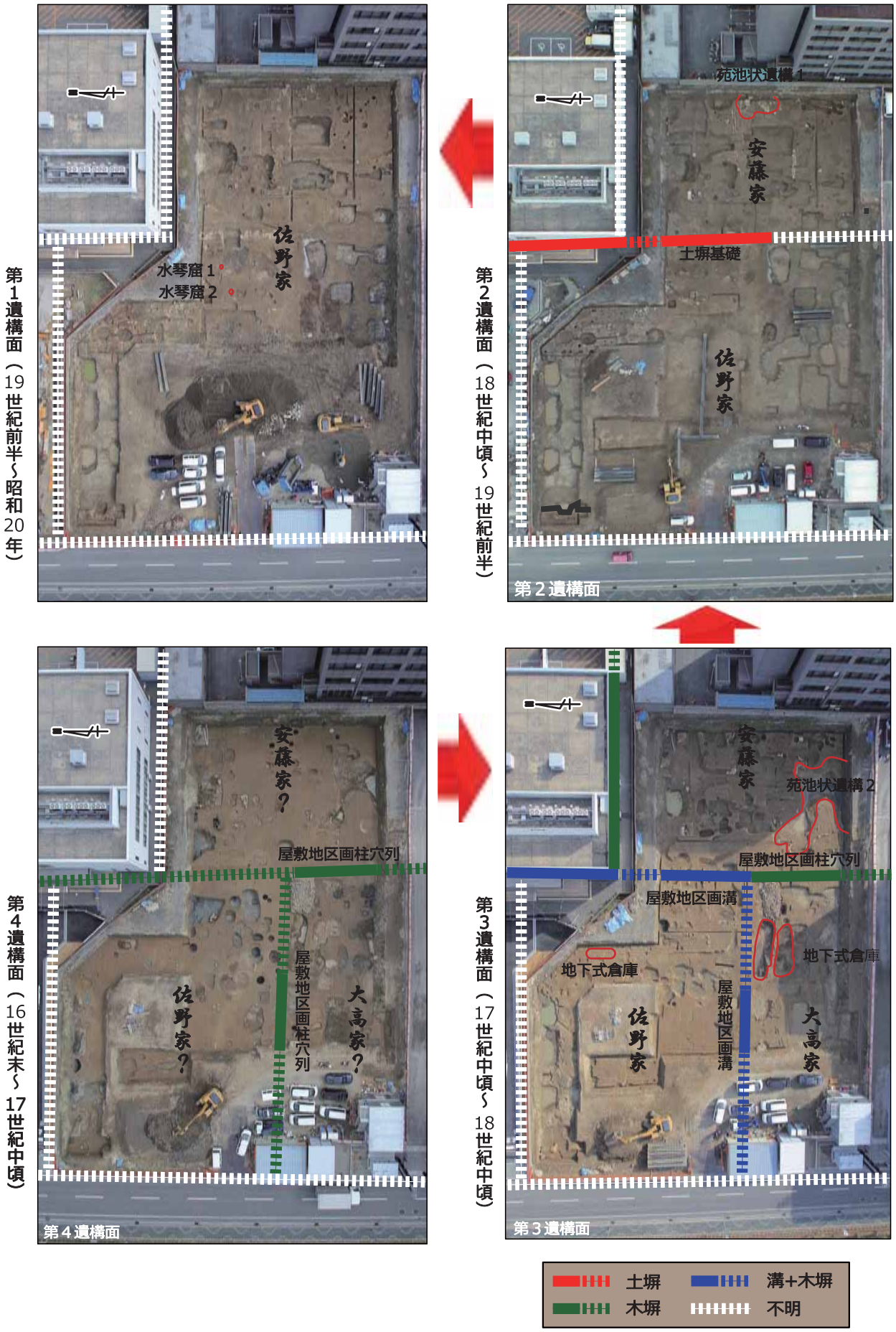

第1遺構面（19世紀前半～昭和20年）
水琴窟1
水琴窟2
佐野家
第2遺構面（18世紀中頃～19世紀前半）
苑池状遺構1
安藤家
土塀基礎
佐野家
第2遺構面
第3遺構面（17世紀中頃～18世紀中頃）
安藤家
苑池状遺構2
屋敷地区画柱穴列
屋敷地区画溝
地下式倉庫
地下式倉庫
佐野家
屋敷地区画溝
大高家
第3遺構面
第4遺構面（16世紀末～17世紀中頃）
安藤家？
屋敷地区画柱穴列
佐野家？
屋敷地区画柱穴列
大高家？
第4遺構面
土塀
溝+木塀
木塀
不明

図４　屋敷地境界の変遷

和歌山県下初の埴輪窯発掘

―和歌山市　平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査―

公益財団法人　和歌山県文化財センター　山本　光俊

1. はじめに

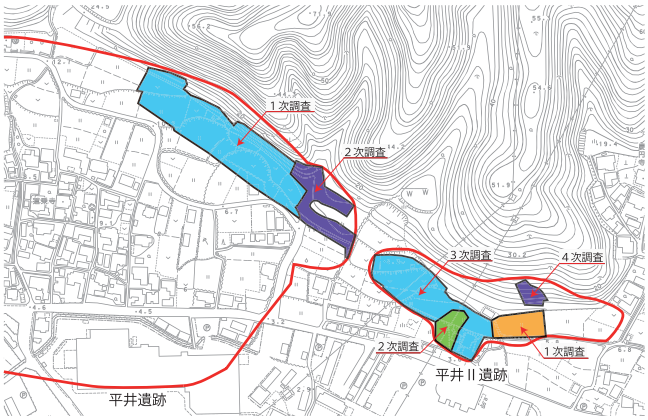
和歌山市平井所在の平井遺跡と、東側に隣接する和歌山市大谷所在の平井Ⅱ遺跡は、現在の紀ノ川河口から約５㎞遡った右岸の丘陵裾部に位置している。古墳時代～古代（６～９世紀）には、紀ノ川の流路が現在より北に及んでいたとされ、平安時代の文書にはこの地にあったとされる「平井津」の記述がみられるなど海運が栄えていたことが推測される。

周辺には５世紀後半に築造され、馬冑（ばちゅう）や馬甲（ばこう）などの朝鮮半島との深い関わりを示す遺物が出土した国指定史跡の大谷古墳、５世紀前半～６世紀前半につくられた晒山（さらしやま）古墳群、５世紀後半～６世紀前半につくられた雨が谷古墳群、５世紀後半～７世紀につくられた鳴滝古墳群などの古墳群が位置している。また、鳴滝古墳群の北西部に位置する鳴滝遺跡では倉庫と考えられる大型掘立柱建物７棟が並んだ状態で検出され、楠見遺跡からは初期須恵器が多量に出土している。

このように、両遺跡の周辺には古墳時代の遺跡が多数存在している。

399　平井遺跡　　437　平井Ⅱ遺跡　　70　楠見遺跡　　指６　大谷古墳
62・64・65　晒山古墳群　　63　慶円寺裏山古墳　　66～69　雨が谷古墳群
360　雨が谷遺跡　　71　鳴滝古墳群　　362　鳴滝遺跡

遺跡位置図



調査地位置図

遺跡周辺航空写真（上が北東）

2. これまでの調査成果

これまで平井遺跡・平井Ⅱ遺跡では一般国道 26 号第二阪和国道の建設工事に伴い、４回の発掘調査を行っている。平成 24 年６月～ 10 月に平井Ⅱ遺跡（第１次調査）、平成 25 年１月～２月に平井Ⅱ遺跡（第２次調査）、平成 25 年７月～平成 26 年３月に平井遺跡（第１次調査）・平井Ⅱ遺跡（第３次調査）、平成 25 年 10 月～平成 26 年２月に平井遺跡（第２次調査）・平井Ⅱ遺跡（第４次調査）の発掘調査が行われている。

●平井Ⅱ遺跡（第１次調査）

古墳時代～近世の遺構を検出した。古墳時代の竪穴遺構を１基検出し、多数の初期須恵器が出土している。組紐紋や竹管紋等を施し、南東に隣接する楠見遺跡出土の初期須恵器と共通する点がある。また、円筒埴輪及び形象埴輪も出土した。

●平井Ⅱ遺跡（第２次調査）

古墳時代～近世の遺構を検出した。遺物は中世の瓦器や古墳時代の初期須恵器、土師器、埴輪片があり、乳状突起を付した甕或いは壺の破片が２点出土している。乳状突起をもつ初期須恵器が出土するのは、楠見遺跡など限られた遺跡のみであり、注目すべき遺物と言える。

●平井遺跡（第１次調査）・平井Ⅱ遺跡（第３次調査）

平井遺跡では、古墳時代・奈良時代・中世の遺構を検出した。特に古墳時代の遺構や遺物が多く検出されている。

古墳時代の遺構として調査区西端部の丘陵裾部で、古墳の横穴式石室を検出した。古墳の横穴式石室は後世の大規模な削平により、底部の石が２段分ほど残っているのみである。また、石室から西に約 12 m離れた位置で、石材が抜き取られたと考えられる石室の痕跡を検出した。両遺構の周辺から陶棺の破片が多く出土している。陶棺の破片の出土は県内では４例目である。一方、調査区東側の丘陵裾部では、埴輪窯を２基検出した。内部からは円筒埴輪や馬形や家形などの形象埴輪が多く出土している。また、埴輪窯の周辺からも多くの円筒埴輪や形象埴輪が出土している。

奈良時代と中世の遺構には調査区の中央南側で、複数検出した掘立柱建物や井戸がある。掘立柱建物は分布が南に広がる状況を示しているため、この方向に建物群が広がることが推定される。中世の井戸には素掘りと石組のものとがあり、いずれも内部から瓦器椀が出土している。

平井遺跡（第１次調査）横穴式石室

平井遺跡（第１次調査）掘立柱建物

平井Ⅱ遺跡では、古墳時代と中世の遺構を検出した。古墳時代の遺構として土坑、柵列、掘立柱建物などを検出しました。調査区の中央南側では、南側を除くコの字状の杭列とその内側で掘立柱建物と考えられる柱穴を検出した。杭は径約 0.25 m、深さ約 0.2 mで、西列で９本、北列で８本、東列で７本の計 22 本（うち２本は重複）を検出した。また、調査区の東端で検出した楕円形の土坑からは、初期須恵器と考えられる高坏の坏部が出土しており、５世紀前半の時期と考えられる。中世の遺構として井戸、木組み遺構、鋤溝状遺構などを検出した。調査区中央で検出した方形の木組み遺構で、掘方の一辺が約 0.7 m、深さが約 0.3 mある。四辺には縦方向に板を並べ、四隅には縦方向に杭を打ち込んでいたと考えられ、底板は確認されていない。埋土から瓦器椀が数点出土している。

平井Ⅱ遺跡（第３次調査）杭列・掘立柱建物

平井Ⅱ遺跡（第３次調査）木組み遺構

●平井遺跡（第２次調査）・平井Ⅱ遺跡（第４次調査）

平井遺跡では、奈良時代と中世の遺構を検出した。奈良時代の土坑からは、須恵器坏･甕、土師器甕、土錘、製塩土器、埴輪、砥石状石製品などが出土し、古墳時代の遺物と奈良時代の遺物が混在した状態で出土した。中世の土坑からは、瓦器椀を正位に置き、その上から伏せた状態の瓦器椀が出土した。中には何も入っていなかったが、五穀あるいはその類のものを入れて地鎮を行った遺構と考えられる。また、江戸時代のものと考えられる底樋（池の排水施設）を約９m検出した。これは松材を半裁し刳り抜き、上下に合わせて差し込み方法で延長して排水管として利用されたものと考えられる。

平井Ⅱ遺跡では、古墳時代と中世の遺構を検出した。古墳時代と考えられる土坑からは埴輪片が出土している。

平井遺跡（第２次調査）廃棄土坑

平井遺跡（第２次調査）地鎮遺構

3. 平井遺跡（第１次調査）の埴輪窯

埴輪窯は調査区東側の丘陵裾部を掘削中に１号埴輪窯を検出し、調査区外の北側に埴輪窯が延びる可能性や新たな埴輪窯の存在が考えられたため、範囲を追加して調査を行った結果、１号埴輪窯跡の北端を確認した。また、１号埴輪窯から南東に 25 m離れた場所で新たに２号埴輪窯を検出した。

県内では、和歌山市の森小手穂（もりおてぼ）埴輪窯跡などが従来から知られていたが、発掘調査は行われていなかった。そのため、平井遺跡の埴輪窯が和歌山県内で初めて発掘調査を行った埴輪窯の事例となる。近畿地方では、大阪府高槻市の新池遺跡や奈良県奈良市の菅原東遺跡などが埴輪窯の調査例として広く知られている。

● １号埴輪窯

丘陵に裾部を北東から南西方向に延びる形状で掘りこみ、周囲からは排水溝や覆い屋の柱穴などの付帯施設は検出されておらず、上部は後世の削平を受けていたため、煙道部は残存していなかった。窯壁には粘土の貼り付けなどはなかったが、被熱により焼けて赤くなっているのが明瞭に見られる。焼成部の深さは約 0.3 mで床面の傾斜角度は約 28 ° である。焼成部内部の堆積状況から３回程度にわたる焼成が行われていた可能性が考えられる。内部から出土した埴輪は、土師質の円筒埴輪の他、石見型埴輪、蓋形埴輪などの形象埴輪も含まれる。

１号埴輪窯　床面３

１号埴輪窯　焼成部検出状況

１号埴輪窯　燃焼部床面３

● 2 号埴輪窯

丘陵に裾部を北東から南西方向に延びる形状で掘りこみ、周囲からは排水溝や覆い屋の柱穴などの付帯施設は検出されておらず、上部は後世の削平を受けていたため、煙道部は残存していなかった。窯壁には粘土の貼り付けなどはないが、被熱により焼けて赤くなっているのが明瞭に見られる。

焼成部の深さは約 0.6 mで床面の傾斜角度は約 23 ° である。焼成部内部の堆積状況から 6 回程度焼成が行われていた可能性が考えられる。内部から出土した埴輪は、一部須恵質のものもみられるが、土師質の円筒埴輪が中心であり、横向きに並べて置かれた状態で出土したため、床面に据えて焼台として利用されていたと考えられる。朝顔形埴輪や家形埴輪、馬形埴輪などの形象埴輪も出土している。

2 号埴輪窯　床面 2

	1 号埴輪窯	2 号埴輪窯
全長（灰原含む）	7.0m 以上	10.0m 以上
煙道部	未確認	未確認
焼成部長さ	約 2.0m	約 4.5m
燃焼部長さ	約 1.0m	約 1.0m
窯本体幅	約 1.2m	1.1 ～ 1.5m
焼成回数	3 回程度	6 回程度
灰原長さ	4.0m 以上	4.5m 以上
灰原幅	最大約 3.0m	約 1.5m の掘り込み

埴輪窯の規模比較表

2 号埴輪窯　焼成部堆積状況

2 号埴輪窯　焼成部床面 2

2 号埴輪窯　灰原

馬形埴輪

家形埴輪

胡籙形埴輪

双脚輪状文埴輪

双脚輪状文埴輪

人物埴輪

4. おわりに

今回調査が行われた平井遺跡の調査範囲北側にある丘陵上で前方後円墳が新たに発見された（平井１号墳）。墳丘採集資料より、円筒埴輪や石見型埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪などが立て並べられていた可能性が推定され、築造年代は６世紀代と考えられる。

なお、２号埴輪窯の南東側の包含層から多くの埴輪が出土している。円筒埴輪が多いが、石見型埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、人物埴輪、蓋形埴輪、胡籙形埴輪、双脚輪状文埴輪などの形象埴輪もみられる。胡籙形埴輪、双脚輪状文埴輪はこれまで紀ノ川南岸でしか出土しておらず、川を越えて搬入されたものと考えられる。

従来の研究では、古墳時代における紀ノ川北岸の勢力と南岸の勢力との関係について、５世紀に大谷古墳や車駕之古址古墳といった大型の前方後円墳を造った紀ノ川北岸の紀臣（きのおみ）系の勢力から、６世紀に入って大型の前方後円墳が造られた岩橋千塚古墳群のある南岸の紀直（きのあたえ）系の勢力に権力の中心が移ると考えられてきた。しかし、紀ノ川北岸にある平井遺跡において紀ノ川南岸の埴輪の特徴である、結晶片岩を含む埴輪も出土していることから、埴輪の生産に関わった工人の移動や埴輪自体の移動を検討するとともに、紀ノ川南岸勢力の影響力が紀ノ川北岸に及んだ可能性も考えられるなど、従来の研究を再考しなければならない成果が得られた。

また、埴輪窯出土の埴輪は、生産地が特定されるため、供給先（古墳出土の埴輪）がわかれば関連性の解明につながる手がかりを得ることができる。

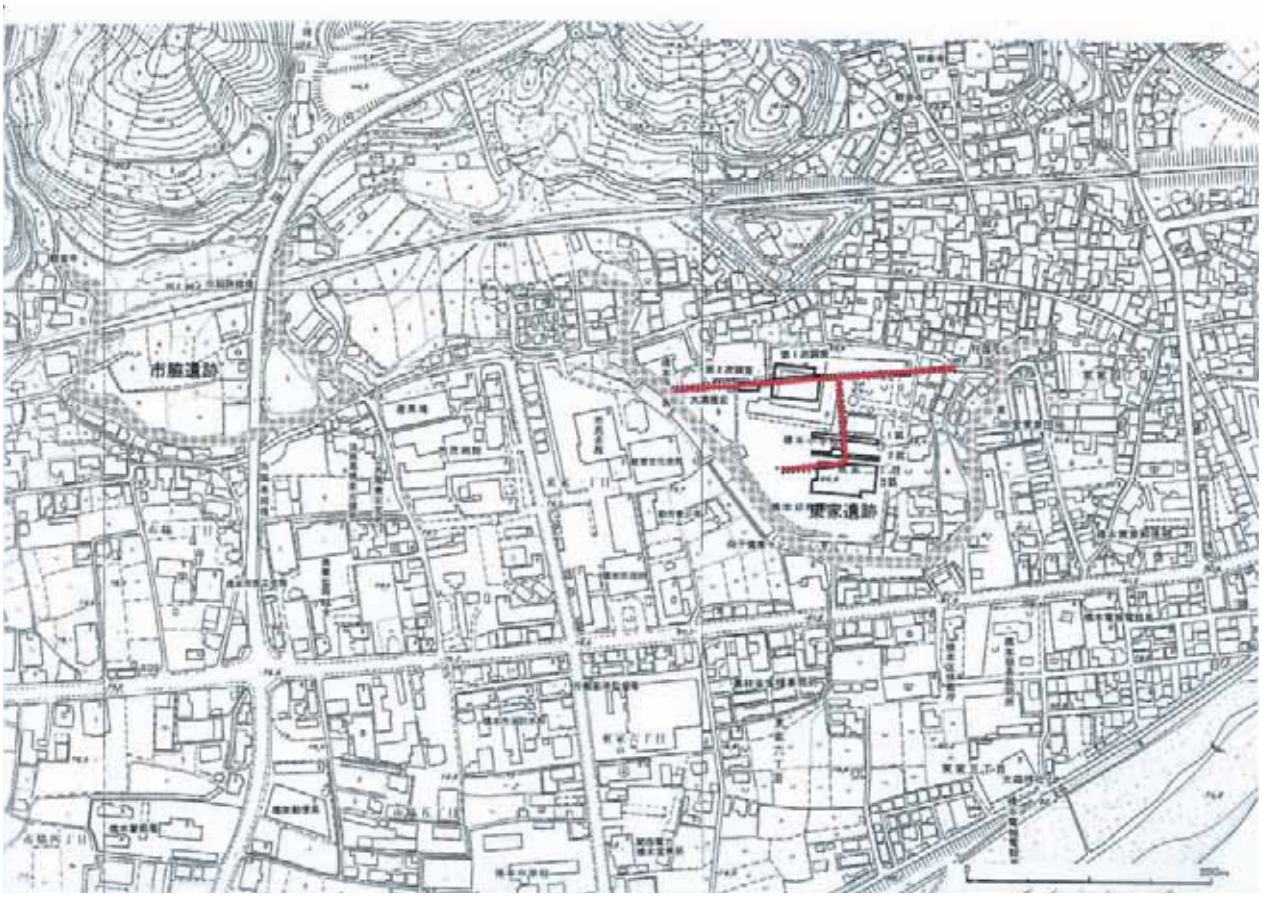
出土した埴輪の整理はこれからではあるが、紀伊における埴輪生産や古墳の展開過程、地域の勢力関係を解明する上で、非常に重要な発見といえるだろう。

東家遺跡（とうげいせき）・東家館跡（とうげやかたあと）の発掘調査

橋本市教育委員会　大岡　康之

1. 遺跡の立地

橋本市は和歌山県の北東部に位置し、北は大阪府河内長野市と東は奈良県五條市と接する。市域の北部は和泉山脈が横たわり、南部は紀伊山地の山々が占め、そのほぼ中ほどを大台ケ原に源を発する紀の川が左右両岸に河岸段丘を形成しながら東から西へと豊富な水量を湛えて流れる。東家遺跡・東家館跡は橋本市の中央部、紀の川北岸の橋本市東家、旧橋本小学校付近に存在し、紀の川とかつての氾濫原を見下ろす台地上に営まれた遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。遺跡は北方の丘陵から南側の紀の川に向って突き出した、いわゆる舌状台地にあって、周囲と台地上の比高差は約 20 mに及ぶ。地形としては東・南・西の三方が約 20 mの断崖、北側だけが河岸段丘からの地続きとなる。舌状台地上は削平により平地を造り出しているが、概ね北から南に向って緩やかに傾斜している。紀の川北岸の西方約 500 mには市脇遺跡、東方約 500 mには古佐田遺跡、南東約 1.5 ㎞の紀の川対岸には上田遺跡が存在するなど、東家遺跡周辺の紀の川沿岸には同様の立地条件をもつ舌状台地に営まれた遺跡が点在する。



第 1 図　位置図

2. 調査に至る経過

東家遺跡・東家館跡が所在する旧橋本小学校跡地は、橋本小学校が平成 25 年 4 月に橋本中学校敷地内へ移転し、この地に橋本こども園建設が計画されるにこととなった。橋本市教育委員会が平成 25 年 7 月及び 9 月に確認調査を実施したところ、遺構・遺物が確認され地下に遺跡が保存されていることが明らかとなったため、橋本市遺跡調査会を組織して、平成 25 年 10 月 28 日から園舎建設予定地である旧校庭内の運動場に調査区を設定して発掘調査を開始した。

3. これまでの調査の概要

東家遺跡が所在する橋本小学校跡地ではかつての学校施設建設工事等により埋蔵文化財の出土していたことが知られている。なかでも昭和 39 年のプール建設の際には大量の遺物が出土したと伝わるが残念ながらその遺物は現存していない。その他、運動場や運動場西端の崖から遺物が出土したとも伝わる。

（1）東家遺跡第 1 次発掘調査

昭和 58 年度橋本小学校屋内運動場建設に伴う発掘調査で、東家遺跡の学術調査がはじめて行われた。この調査では大きく分けて古墳時代中期・後期と、鎌倉時代から室町時代にかけての二時期が東家遺跡の最も盛んな時期であったことが明らかとなっている。それまで東家遺跡は弥生土器の散布地として紹介されてきたが、この調査では弥生時代の土器片が僅かに出土したのみにとどまっている。

古墳時代の遺構は方形平面プランを持つ竪穴住居跡が中心で、5 世紀から 6 世紀にかけての住居跡と推定されている。何棟もの竪穴住居跡が重なった状態で検出されており、方形プランの一辺中ほどにカマドが作り付けられたものも認められる。この調査では竪穴住居跡とみられる遺構は約 20 棟分にも及び、古墳時代の東家遺跡の繁栄ぶりが偲ばれる。出土遺物では土師器・須恵器などの土器類が多くを占め、須恵器の中には初期須恵器の器台なども確認されている。

東家遺跡　第 1 次調査全景

次に東家遺跡が注目されるのは鎌倉時代から室町時代にかけての時期。多くの瓦器碗が出土しており、13 世紀から 14 世紀にわたって遺跡が営まれたことが推定されている。青磁・白磁・染付などの中国製磁器をはじめ、常滑・備前・美濃瀬戸系国産陶器、土師質や瓦質の土器など多彩な出土品が確認されている。遺構としては竪穴遺構や土壙などがみられるが、ここで注目されるのは調査区のほぼ中央を東西に幅約 5 m、深さ約 1.3 mの大溝が貫通していることが確認されたことであり、出土遺物から 14 世紀末から 15 世紀前半までを中心とした期間に用いられたと推定されている。この大溝は確認された区間をそれぞれ東西に延長すると、まさに東家遺跡が所在する突き出した舌状

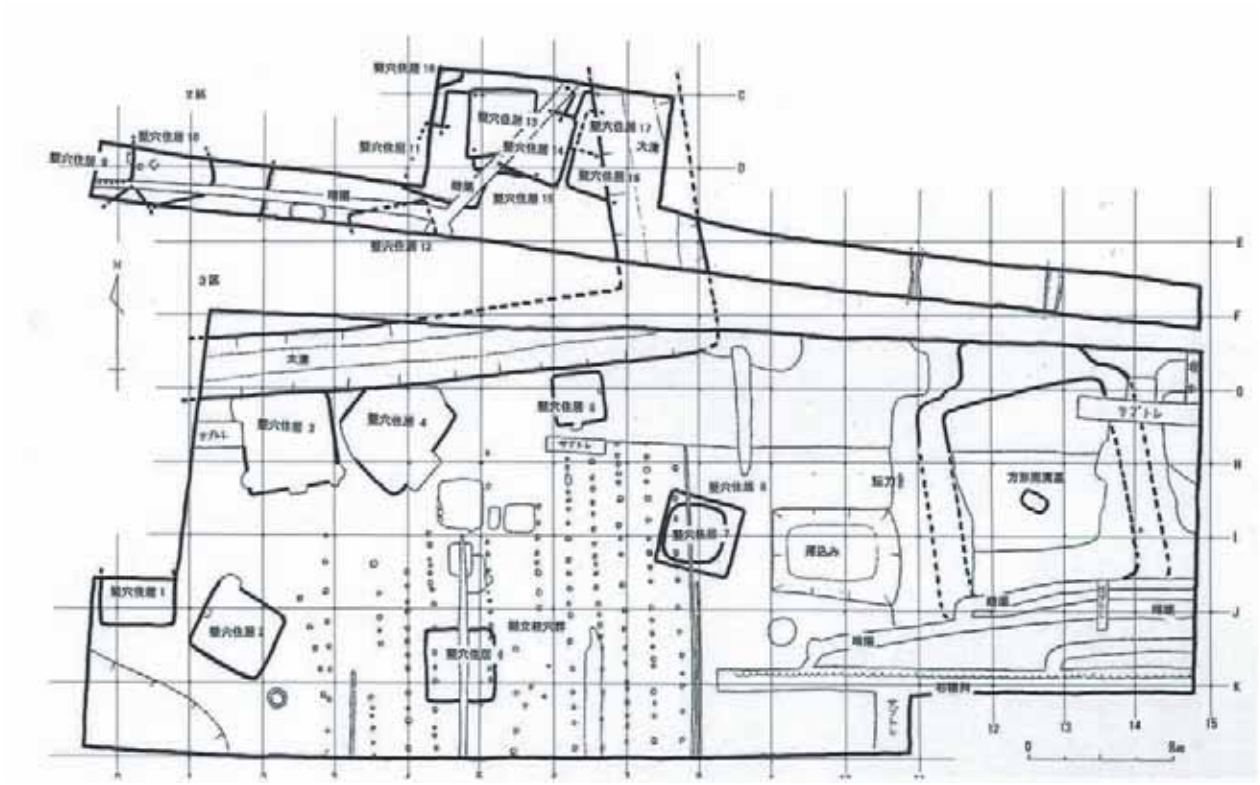
台地の頚部を区切って、先端部を独立した台地として要害となしうることから、大溝は堀切として用いられた可能性が考えられる。また、当地には文献史料から守護に匹敵する勢力の拠点があったとの指摘があり（岩倉哲夫氏）、史学と考古学の両面からこの遺跡の実態に迫ることができることとなった。

（2）東家遺跡第 2 次発掘調査

第 1 次調査に続いてその西側で橋本小学校倉庫の建設が計画され、昭和 58 年度に発掘調査が実施された。この調査でも古墳時代の方形平面プランをもつ竪穴住居跡が確認されるとともに、1 次調査で発見された中世大溝の西側延長部分が検出された。これにより古墳時代の竪穴住居跡群が西方にも広がっていたことが確認され、さらに、堀切とみられる中世大溝が西方へも延びていたとの推定が裏づけられた。また、さらに西方の台地西端部での民家建設の際にも大溝跡が確認されたことから、遺跡の所在する突き出した舌状台地頚部の西半に大溝（堀切）が設けられていたことは確実となった。

4. 調査の概要

発掘調査は北から進入路予定地の 1 区、防火水槽と擁壁が設けられる 2 区、こども園園舎が建つ 3 区の 3 か所に調査区を設け、発掘調査を実施することとした。調査区最南端の 3 区南部では遺構



第 2 図　遺構図

検出面までの深さは10㎝に満たない状態で、調査北端の1区では地表から遺構検出面まで約60㎝と北に向って深くなる傾向が確認されている。

（1）主な遺構

ａ．石組列　3区南端の東約半分で東西に26ｍにわたって石垣列を確認した。石垣の南側にサブトレンチを入れて調査したところ元の地形は南側が約70cm低くなっており、最下部には耕土の堆積があり農地として利用されていたことが知られる。埋土には現代遺物が含まれていることから小学校グラウンド造成の際に埋め立てられたものとみられる。

石組列

ｂ．掘立柱穴群　3区中央部から南部にかけて掘立柱の柱痕列が確認されている。南北に並んだ整った柱痕列は掘立柱建物が整然と並んでいたことが想像される。中世のものとみられる。

掘立柱穴群

ｃ．大溝　3区北西部と2区・1区中央部でＬ字状に大規模な溝が確認された。幅は4～5ｍ深さ1.5ｍにも及び、3区北辺中ほどで直角に折れて北方と西方に向っていることから、中世の遺構で堀として用いられたとみられ、第1･2次調査で発見された東西に貫く大溝との関連が察せられる。

大溝　2区での検出情況（南から）

大溝　3区北西部での検出状況（西から）

ｄ．竪穴住居跡　古墳時代の竪穴住居跡が20基近く検出されている。第1･2次調査でも20基以上の竪穴住居跡が見つかっていることから、古墳時代この東家遺跡の台地上には大集落が営まれていたことが想像される。多くの方形平面プランを持つ竪穴住居跡は5～6世紀のものであるが、隅丸

竪穴住居跡

竪穴住居跡

方形の平面プランを持つ弥生時代に遡りうる竪穴住居跡も今回初めて確認された。

e．方形周溝墓　3区東部で方形周溝墓がこの遺跡で初めて確認された。一辺が9～10mの規模を持つが、主体部とみられる土坑からは遺物は確認できなかった。周溝からは弥生時代中期の土器が出土している。

方形周溝墓

（2）主な出土遺物

a．中国製磁器　大溝を中心に中世の遺構から出土している。当時の舶来の中国製品が少なからず出土していることから、中世には輸入品を入手しうる有力者の存在が窺い知れる。大溝の性格を考える手懸りとなるものであろう。

b．瓦器碗　同じく中世の遺構から多数出土している。弥生時代の方形周溝墓の東と西の周溝では中世の溝と重なった状態で検出されており、ここから多くの瓦器碗が出土している。瓦器碗は器高が低く高台が退化してきているもので、14世紀頃のものとみられる。

c．国産陶器、土師質・瓦質土器　これも中世の遺構から出土しているが量としては瓦器ほどの出土はない。備前焼擂鉢や瓦質捏鉢などがみられる。

d．土師器、須恵器　古墳時代の竪穴住居跡を中心に出土している。5～6世紀のものが多くを占めるが、8世紀代とみられるものも出土している。

e．弥生土器　方形周溝墓、竪穴住居跡などから出土している。弥生時代中期・後期の土器が出土しており、サヌカイト製の石錐も確認されている。

弥生土器出土状況　方形周溝墓周溝内

調査区全景

5. まとめ

今回の調査では第 1･2 次調査の成果として、東家遺跡では古墳時代、そして鎌倉～室町時代に盛期のあることが確認されている。そして大溝の発見により中世の館跡の存在が推定されるという点が指摘されているが、今回の調査ではこれを補完・裏付けするとともに新知見も確認される結果となった。古墳時代においてはこれまでの調査で検出した竪穴住居跡は 40 基を越え、5 ～ 6 世紀には大集落が形成されていたと推定される。また、中世には 13 ～ 14 世紀の瓦器碗出土が認められるとともに、14 世紀末から 15 世紀の大溝（堀切）が発見され、館跡の存在が推定されていた。さらに今回も同規模の大溝が館内とみられる区域の中央で L 字状に確認しており、館跡内部もさらに堀で区画されていたことが確認された。新知見としては、今回初めて弥生時代の方形周溝墓や竪穴住居跡などの遺構が確認された。これまで弥生時代の遺物が数点確認されていただけであり、弥生時代の東家遺跡の一端も窺い知れるようになった。

【参考文献】

・土井孝之『東家遺跡発掘調査概報―橋本市市立橋本小学校屋内運動場建設事業に伴う緊急発掘調査―』橋本市教育委員会 1984

・村田　弘・大岡康之『市脇遺跡ほか発掘調査概報』橋本市教育委員会 1984

・大岡康之「〔発掘事例から〕東家館跡」『和歌山地方史研究 25・26』和歌山地方史研究会 1994

・岩倉哲夫「橋本地域の戦国史と城郭／守護畠山氏の拠点東家館」、「各城館跡の報告／東家館跡」『和歌山城郭研究第 9 号』和歌山城郭調査研究会 2010

小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査

公益財団法人　和歌山県文化財センター　川崎　雅史

1. はじめに

小松原Ⅱ遺跡（24）は、御坊市湯川町小松原に所在する縄文時代後期・弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、ＪＲ御坊駅から紀央館高校・湯川中学校にかけて展開している。周辺には多くの遺跡が残されており、江戸時代になり日高別院の周りに寺内町が形成されるまでは、各期を通じて日高地方の中心地として栄えたところである。

湯川氏館跡（25）は小松原Ⅱ遺跡の一画にあり、室町幕府の奉公衆で、日高地方を拠点に有田・牟婁地方に影響を及ぼした湯川宗家の館跡である。湯川町の町名は湯川氏に由来するもので、紀央館高校の校名も湯川氏館の跡地に築かれていることによるものである。

発掘調査は湯川中学校改築工事に伴うもので、御坊市の委託を受けて平成 25 年６月から 12 月にかけて面積 3,787 ㎡を対象に実施した。調査区は体育館部分の調査区１と校舎部分の調査区２に分かれ、弥生時代、奈良時代から江戸時代の遺構・遺物がみつかった。

2. 調査の成果

弥生時代　検出した遺構はすべて中期のもので、竪穴建物５棟・溝３条・土器棺墓１基・土坑などがある。建物はすべて調査区１で検出している。

003 建物はほぼ円形を呈し、直径 5.5 mで、残存する壁の高さは 0.2 mを測る。主柱は６本で、二個一単位で検出できることから、建替えが行われていることが窺える。建物中央には楕円形を呈する深い土坑があり、底には厚く炭が堆積していた。土坑長軸方向の両側には、柱穴が取り付き、所謂「松菊里型住居」の形態をもつ。土坑北側の床面では２箇所の地床炉が認められ、地面が強く被熱し、硬化していた。

004 建物は北側の２/３程度が調査区域外となるが、検出した輪郭から判断して、直径 8.4 m程度の円形プランの建物になると推定できる。残存する壁の高さは残りの良い箇所で 0.3 mを測る。壁溝に沿うように幅 0.35 ～ 1.0 m、高さ 0.05 m前後のベッド状遺構が構築されている。

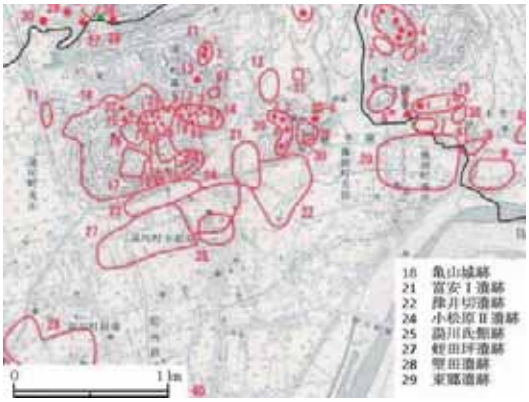


図１　遺跡所在地

写真１　遺跡近景（南東から）
向こう側に亀山城跡が見える

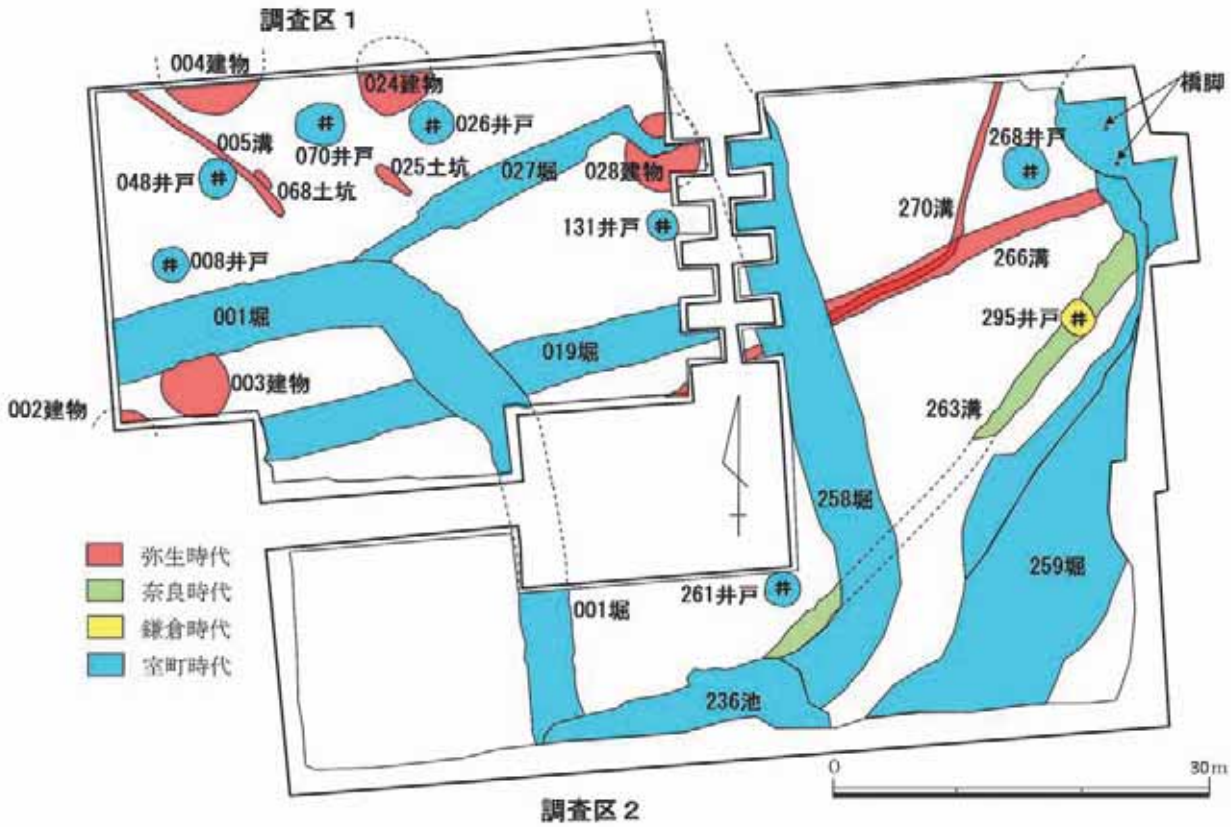


図２　検出した主要遺構

024 建物は平面プランが隅丸方形に近く、一辺（直径）が５m前後に復元できる。残存する壁の高さは 0.1 m前後である。主柱は４本であったと考えられ、調査区内では３つの柱穴を検出している。建物中央には不整楕円形を呈する土坑があり、底には厚く炭が堆積していた。土坑に接した床面には地床炉が２箇所存在し、赤色あるいは橙色に変色して硬化していた。建物からは柱や垂木などの建築部材が炭化した状態で出土しており、火災に遭っていることが窺える。炭化木の残存状態は良くないものの、焼け落ちた状態を観察してみると炭化木の上に焼土が認められることからも、上屋を葺いた萱などの上に土を載せていたことが想像できる。また、炭化木や焼土の上からは、ほぼ同形態の壺５個が伏せられた状態で出土している。二次焼成を受けていない状況からも、建物が焼け落ちた後に置かれたものであると考えられ、儀式に伴う土器の可能性がある。

028 建物は南北 6.15 m、東西 6.0 mで、壁の高さは残りの良い箇所で 0.35 mを測る。主柱は６

写真２　003 建物（北から）

写真３　024 建物（東から）

本であったと考えられる。建物中央には、上部が楕円形・下部が円形に掘削された土坑があり、下部には灰や炭が混ざる土が堆積していた。土坑の南に接して地床炉が存在し、床面が被熱して赤く硬化していた。建物南西の壁際には長楕円形を呈する土坑が掘削されており、下部がわずかに袋状となる状況からも、貯蔵穴の可能性が高い。

写真４　土器棺墓（南から）

土器棺墓は、003 建物の北東側の壁際に位置する。壁をわずかに抉るように小穴を掘削し、その中央に土器棺を納めたものであるが、南側は撹乱により一部破壊されていた。土器棺は口縁部を打ち欠いた甕の口に、脚部を欠いた高杯杯部を被せたものである。早世した小児を屋内に埋葬したものと考えられる。

266・270 溝は調査区２で検出しているが、二つの溝を境に南東側にはほとんど弥生時代の遺構が存在せず、また地形的にも南東方向に徐々に下ることからも、集落を区画する溝であった可能性がある。

弥生時代の遺物は、各遺構から弥生土器（壺･甕･鉢･高杯･器台･複合土器･回転台形土器）、石器（石鏃・石包丁・石錘・台石・敲石・石皿）などがある。003 建物では、床面上から台石などとともに比較的原位置を保つと考えられる土器が出土している。また、004 建物では、ある程度埋まった段階で、大量の土器が廃棄されていた。

奈良時代（古代）　調査区２で検出した 263 溝がある。北東－南西方向に一直線に伸び、両端は後世の遺構により削平される。中程でも途切れた状態になっているが、長さ 43.0 m以上伸び、さらに調査区外に続いていたと考えられる。断面は船底状を呈し、古代の須恵器･土師器･瓦などが出土する。

奈良時代の遺物は、調査区２南東部の谷状遺構などから土師器、製塩土器、須恵器、瓦、木製品（曲物･ヘラ状木製品･木簡？）などが出土する。瓦には、瓦当の文様から白鳳時代に遡る軒丸瓦がある。他の瓦については、須恵質のものや布目･縄目などの特徴から古代瓦の範疇で抑えることができるが、明確な時期は確定できない。

鎌倉時代　調査区２で検出した 295 井戸がある。井戸側は板組で、幅 10 ～ 20 ㎝、厚さ１㎝程度の板材を立てて一辺 0.8 mの方形枠を設け、下端（底から 0.4 m上位）には横方向に角材を当てて固定していた。その下端から下位は枠の幅が一辺 0.65 mと小さくなり、幅 20 ㎝程度の板材を横方向に当てて固定していた。遺物は少なく、堀形や井戸側埋土から瓦器・土師器の破片が出土している。

写真５　295 井戸（北東から）

このほかの遺物としては、調査区２南東部の谷状遺構などから瓦器、土師器、東播系須恵器、青磁、青白磁、石鍋、木製品（折敷・角塔婆）などがみつかっている。土器類の特徴からほとんどが 13 世紀後半代に帰属する。

写真６　259 堀断面（南西から）

写真７　259 堀底橋脚遺構（南から）

室町時代　堀（溝）４条・井戸７基・池などがあり、すべて湯川氏館に関係すると考えられる。また、堀・井戸は、すべてが併存するものではなく、少なくとも３時期を想定することができ、館の改修などに伴って埋戻しや掘削を行っていると判断できる。

調査区２の東でみつかった 259 堀は、幅 11 m、深さ約２mで、規模から館東を区切る外堀であると考えられる。調査区北東部では堀がＣの字状に湾入しているが、東肩が調査区外であることから全容は明らかでない。ただ、この湾入した部分の堀底には橋脚と考えられる２本の柱があり、館への入口に架けられた橋が存在したと考えられる。

001 堀は幅４～６m、深さ 0.8 ～ 1.2 mあり、調査区内で屈曲して南側は 236 池に繋がる。この堀は西側の紀央館高校の敷地でも３箇所でみつかっており、それらを繋ぐと、池の北側にある東西約 40 m、東西約 30 mの方形区画を巡っていたと判断することができる。

027 堀は 001 堀と重複あるいは繋がり、北東端はクランク状に屈曲して調査区域外に伸び、258 堀と繋がる可能性が高い。両端付近では幅約 1.5 ～ 2.0 m、深さ約１mであるが、中程では南東方向に 1.0 m程度拡幅し、その箇所に石垣を構築している。石垣は堀の南東肩に沿うように 0.5 ～ 1.0 mのやや角のある石を長さ 12 mに亘って積んだものである。石垣前面の堀内には多量の石材が詰まっていたことからも、元々は数段以上に積み上げていたことが窺える。石垣裏込めは幅が狭く、壁を抉るような状態で 0.1 ～ 0.3 m程度のやや角の有る礫や円礫を詰めていた。

室町時代の井戸には、井戸側が石積みのものが６基あり、このうち 008 井戸は底付近に方形枠を設けて、その中央に曲物を据えていた。また、桶状の井戸側をもつ 070 井戸は、底に方形枠を設けて、その中央に桶を据えていた。

写真８　027 堀・石垣（北東から）

写真９　008 井戸（西から）

室町時代の遺物は、堀や井戸などから多量に出土しているのをはじめ、近世の土坑からも多く出土している。これらには、土師器、瓦質土器、備前焼、瀬戸美濃系陶器、輸入陶磁器（白磁・青磁・染付・褐釉陶器）、瓦、石製品（茶臼・硯）、金属製品（小柄・刀装具・刀子・釘）、銭貨、木製品（曲物・折敷・漆椀・箸・横杵・建築部材・柄杓・下駄・扇骨・桶）などがある。ほとんどが湯川氏館に係る遺物であると考えられ、土器の主たる時期は 15 世紀後半頃から 16 世紀後半頃にかけてである。

3. まとめ

弥生時代　弥生時代中期の竪穴建物は、５棟検出した。今回の調査区に北接する湯川中学校特別校舎改築工事に伴う発掘調査でも１棟検出されており、西隣の紀央館高校の敷地では、同時期の土坑や溝・土器棺墓などが存在する。これらのことからも調査区１より北西側に集落が展開していたことが窺える。また、調査区２で検出した 266・270 溝が集落の内外を区画する溝とすれば、今回、集落の南東部の様子が明らかになったことになる。同時期の建物や方形周溝墓などは、同じ小松原Ⅱ遺跡の範囲内で西 250 mにある御坊駅周辺のほか、北東 300 mにある富安Ⅰ遺跡でもみつかっており、同じ集落を構成していたか否かは別としても、小松原Ⅱ遺跡周辺は多くの人々が集住する日高平野のなかでも拓けた地域あったことが想像できる。中期末～後期中頃にかけては集落が途絶え、その後再び集落が営まれるのは後期後半～末頃になってからである。これと連動するように高地性集落である亀山遺跡が出現することからも、両遺跡の関係が注目される。

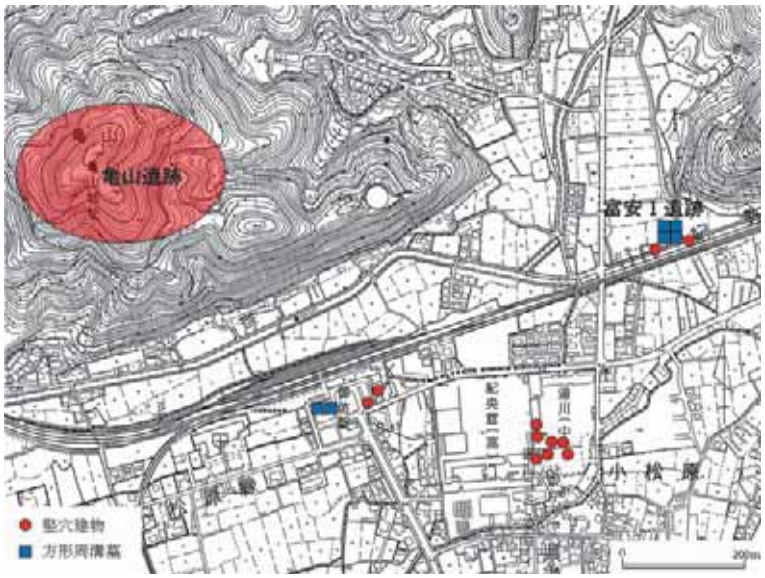


図３　弥生時代中期の小松原

奈良時代（古代）　奈良時代の 263 溝から出土した軒丸瓦は、内区が複弁八葉蓮華文で外区外縁が線鋸歯文を配し、８世紀初頭とされる道成寺創建時のものと同形式である。以前より紀央館高校の改築に伴う調査などで古代に遡る平瓦の破片は出土しており、小松原Ⅱ遺跡付近に古代寺院が存在することは予想されていた。今回出土した瓦から、その寺は創建が白鳳時代に遡ると判断でき、道成寺と同時期から存在することになる。日本最古の仏教説話集である「日本霊異記」に登場する「別寺」である可能性も考えられる。

図４　道成寺創建期の瓦（写真は小松原Ⅱ遺跡出土）

鎌倉時代　鎌倉時代の遺構は井戸のみであるが、

谷状遺構などから土器類とともに角塔婆（位牌）や五輪塔・板碑などが出土しており、既往の調査結果から付近にあったことが予想される浄土系寺院に係るものであると考えられる。

室町時代　これまでみつかった堀のうち、埋土に瓦や焼土を多く含み、規模において幅 10 mを超すものが館の最終段階に帰属し、館の内外を区画するものであると考えられる。これを基準に判断すると、既往の調査によって館の北辺・東辺・西辺と考えられる堀が確認されたことになり、南限が現在も館南方を西流する水路とした場合、最終段階の館の規模は東西約 225 m、南北約 200 mであると想定できる。また、当時の文書などでは、館が「小松原城」の名でも記されていることからも、平城に近い内容であった可能性が高い。実際、紀中・紀南地域の主要な山城からは多くの日常雑器が出るのに対して、非常時などに立て籠もるはずの亀山城からはほとんど土器類が出土しない。山城での生活の痕跡が遺されていないことは、館がかなり防御に優れたものであったことを裏付けるものとも言える。

湯川中学校の南隣にある湯川神社は、館の庭園の名残で、神社前に残る池は、社地（築山）を巡るように存在したことが想定できる。湯川氏は幕府奉公衆であることからも、館の構造も基本的に室町第（花の御所）同様の方形居館となる。各地の守護館も同様に方形居館であることが多く、庭園の位置も館の南東部に築くことが通例とされる。湯川氏館でも、まさにその場所に庭園が位置していることになる。

001 堀と池で囲まれた方形区画の北側では大小の土師器皿が多量に出土し、式三献などの儀式がおこなわれた可能性がある。また、池に近い南側では輸入陶磁器などの高級品がセットで多量に出土しており、饗宴がおこなわれていたと考えられ、方形区画周辺に会所や主殿が存在した可能性がある。

既往の調査から、館の位置には少なくとも 13 世紀後半代に浄土系の寺院が存在したことが窺え、それ以降に館が築かれたと考えられる。南北朝時代、湯川氏は最終的に北朝方となり、それ以来、室町幕府との繋がりが強くなる。幕府から発給される書状も 14 世紀中頃以降のもので、書状の内容からは、その頃すでに家臣団が形成されていたことが窺える。確証はないものの、幕府での地位を得た一四世紀中頃が湯川氏館を築く契機であり、寺に手を加えて館とした可能性がある。

堀や池から出土する瓦や建築部材には焼けたものがあり、また、焼土が多量に出土する状況は、館が焼失したことを物語るものである。これは天正十三年（1585）、羽柴秀吉の紀州攻めに係る火災によるものであり、この時期以降の遺物が出土しないことからも、同時に館は廃絶したと考えられる。

写真 10　焼けた柱材

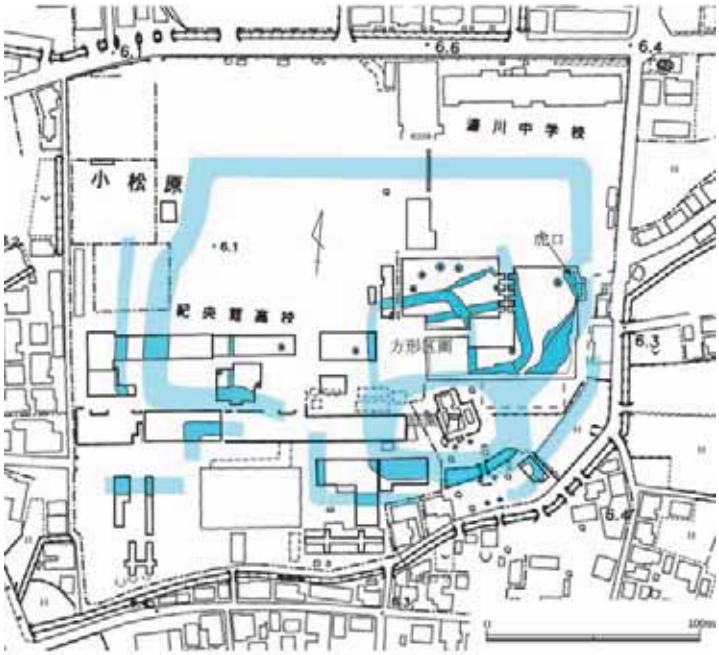


図 5　湯川氏館想定図

長保寺における修理と瓦の調査

公益財団法人　和歌山県文化財センター　下津健太朗

1. 長保寺と境内の建物について

長保寺は和歌山市街の南 15 キロメートル、海南市下津町上に位置する天台宗寺院である。「慶徳山長保寺」と号し、一条天皇の勅願で長保 2 年（1000）に創建され、13 世紀中頃に現在の地へ移されたとする。伽藍には鎌倉時代後期以降に建立された本堂、多宝塔、大門、鎮守堂が残る。江戸時代に入ると、寛文 6 年（1666）に紀州藩の菩提寺に定められ、紀州藩霊殿が建てられて、境内奥には歴代藩主の墓所が築かれるなど、以後は藩の庇護を受けた。

本堂、多宝塔、大門は国宝に、鎮守堂は重要文化財に、墓所を含めた境内地は国史跡に指定されている。

本堂は、桁行 5 間、梁間 5 間、正面向拝 1 間、本瓦葺の建物で、延慶 4 年（1311）の建立とされる。外観は和様を基調とし、内部には禅宗様の意匠を採り入れた、折衷様の建築である。大正 9 年（1920）には解体修理、昭和 47 年には屋根葺替修理を受けて来ている。

多宝塔は、方 3 間、本瓦葺の建物で、心柱の墨書より正平 12 年（1357）の建立とされる。下層中備の蟇股は各面で彫刻の意匠が異なる。昭和 2 年から 3 年にかけて鎮守堂と共に解体修理されている。戦後に台風被害を受けて、幾度か屋根修理が入っている。相輪は鋳鉄製で、最上部の宝輪は欠失していた。

大門は、三間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺の建物で、嘉慶 2 年（1388）建立の建物である。明治 44 年（1911）に解体修理が行われる。軒の出が大きく、優美な姿を見せている。明治の修理以降今回の修理までに棟積みや漆喰壁の補修などの部分修理を受けて来ている。

鎮守堂は、一間社流造、檜皮葺の建物で、鎌倉後期の建立とされる。明治 6 年（1873）の修理においていったんは本瓦葺へと変更されたが、昭和 3 年の解体修理時で桧皮葺に復されている。

長保寺本堂（国宝）　延慶 4 年（1311）建立

長保寺多宝塔（国宝）　正平 12 年（1357）建立

長保寺大門（国宝）　嘉慶 2 年（1388）建立

昭和 36 年に部分修理、昭和 54 年には屋根葺替修理が行われている。

長保寺鎮守堂（重要文化財） 鎌倉後期建立

2. 保存修理事業について

今回の保存修理事業は、事業期間を平成 23 年 1 月より平成 24 年 12 月の 24 か月、工事期間を平成 23 年 4 月より平成 24 年 9 月の 18 か月とし、大門で半解体修理、多宝塔と鎮守堂で屋根葺替・部分修理を行った。

大門では、軸組や小屋組は解体せずに、上層柱以上の不陸調整と軒先のレベル調整、軒先部分の木部補修、桔木の追補など構造材の強化を行い、屋根荷重軽減のため瓦葺きは空葺き工法に変更した。その他、板壁の胡粉塗りや土壁漆喰塗りの塗り替えも行った。多宝塔では、屋根瓦の葺き替えに合わせて、亀腹の漆喰塗り直しや相輪の修理を行った。

この他、鎮守堂では、周辺の樹木が生長して日当たりが悪くなり、また、倒木か小動物によるものか定かではないが桧皮屋根面に穴が空いてしまうなど、建物への影響も生じていたため、保存修理期間中に別途事業として史跡地内の樹木整備も行われた。

3. 保存修理における瓦の調査について

文化財建造物の保存修理は、30 ～ 50 年ごとの維持修理（屋根葺替や塗装修理など）と 150 ～ 200 年ごとの根本修理の 2 つに大きく分けることができる。いずれの修理に際しても、建物の大きさや高さ関係など主要な寸法の実測調査をはじめ、木組みや屋根の納まりなど解体にあわせて行う各部の仕様や痕跡の調査、また、文書や写真など史料の調査も行いながら、それらを基に建物の修理や増改築などの来歴を明らかにしていく作業を行う。

長保寺の指定建造物は、明治末期から昭和初期にかけて一度根本修理を受けているが、その修理記録を取りまとめた報告書までは刊行されていない（補助事業としての修理工事精算書は作成されている）。その後、本堂は昭和 47 年の修理時に報告書が刊行されており、大門、多宝塔、鎮守堂においては今回の保存修理事業で作成した。修理時には当時の修理内容を把握する絶好の機会となるが、今回は根本修理ではなく維持修理が主体であるため、その全容を把握できる訳ではない。そこで、解体範囲である多宝塔と大門の屋根瓦を中心に以下の様な調査を試みた。

4.（調査 1）多宝塔の鬼瓦について

昭和修理前後の写真（次頁）の比較検討と、境内に残されていた瓦類の調査から、多宝塔の隅棟鬼瓦の配置換え状況が図 1 に示す結果と判明した。建物の表側になる南面と西面を重視しながら、下層から上層、上層から下層、といった配置換えも行い、鬼面が欠失してしまった上層北東隅鬼は上層南東隅鬼に倣って補足（旧瓦は境内にて保管）されていた。

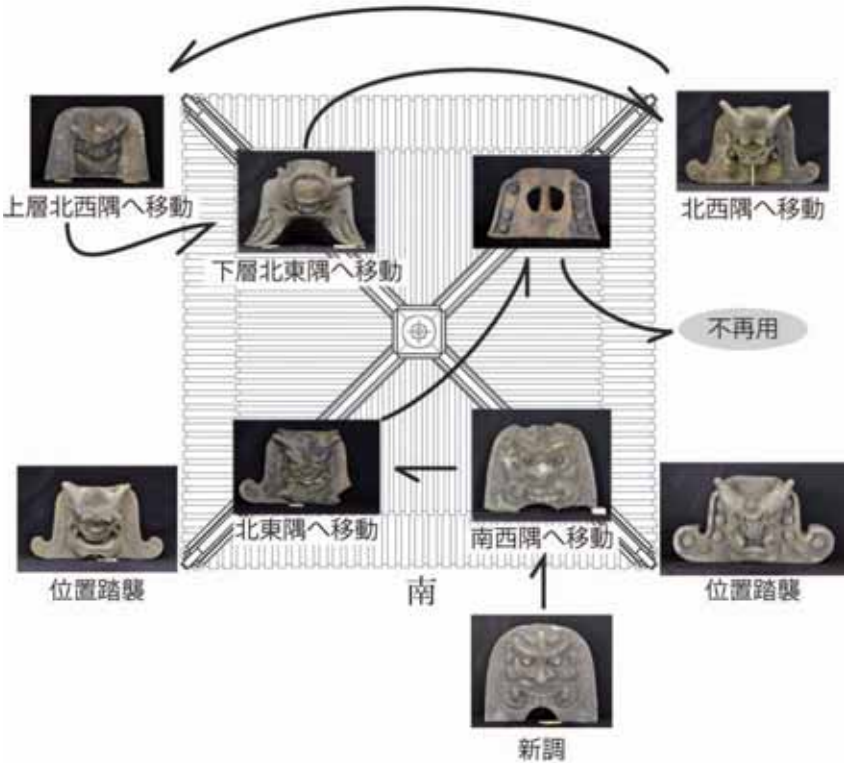


図１　昭和修理におけ鬼瓦る多宝塔隅棟の配置換え

多宝塔の古写真（上が昭和３年修理後、下は修理前）

5.（調査 2）多宝塔の瓦について

多宝塔の瓦割は、下層で 8 寸 5 分割、上層で 7 寸割と上下層で異なる。軒平瓦の構成は、下層が南面・西面を昭和修理時の新調瓦、東面・北面に近世期の瓦 8 種（64 枚）を集める。軒丸瓦は、南面・東面・北面東半に中世期の瓦 11 種（46 本）と近世期の瓦 11 種（32 本）を配し、残りを昭和修理時の新調瓦とする。平瓦や丸瓦も軒瓦と同様に、表側となる南面や西面に昭和修理時の新調瓦を配していた。一方、上層屋根瓦の構成は、各面とも中央 20 枚ずつを中世期の軒平瓦で揃え、中世軒丸瓦は南面に 2 種 7 本を残すのみであった。中世期の平瓦は南・東・北の三面に、丸瓦は南面に配されていた。

下層の軒平瓦・平瓦に中世期の瓦は一枚も無く、調査を進めた結果、昭和修理時に上層東面に集約されたことが判明した。それらはいずれも上層の瓦割に合わせて片傍を欠き落として再用されていた（右写真）。また、昭和修理で新調された下層軒平瓦は、上層東面に集約されたもののうち、上層軒平瓦と瓦当文様が近い瓦を見本に製作されたものと推定された（下写真）。

上層東面に移設して再用されていた旧下層軒平瓦の一例

昭和修理時新調の下層軒平瓦（左）と見本にされた旧下層軒平瓦（右）

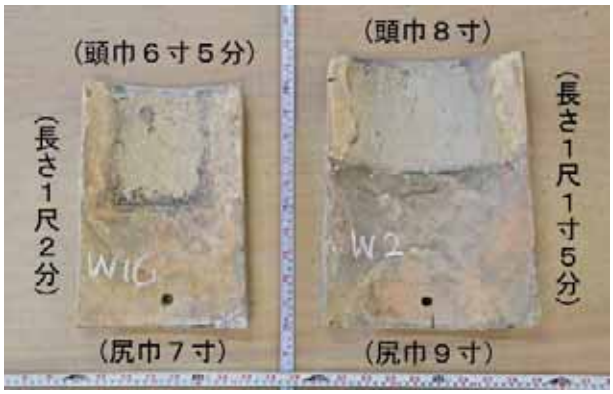
6.（調査 3）大門の瓦について

今回の修理では、多宝塔に先駆けて大門で屋根瓦の解体を行った。平瓦総数 3,800 枚のうち 1,400 枚、丸瓦総数 1,930 本のうち 450 本、と数多く残る大門の中世期の瓦類を分類した結果、次に挙げる様な傾向がうかがえた（下表、右写真）。

①大門建立当初と比定された軒平瓦・軒丸瓦と対応する平瓦（5%）・丸瓦（4%）の割合が極端に低い。

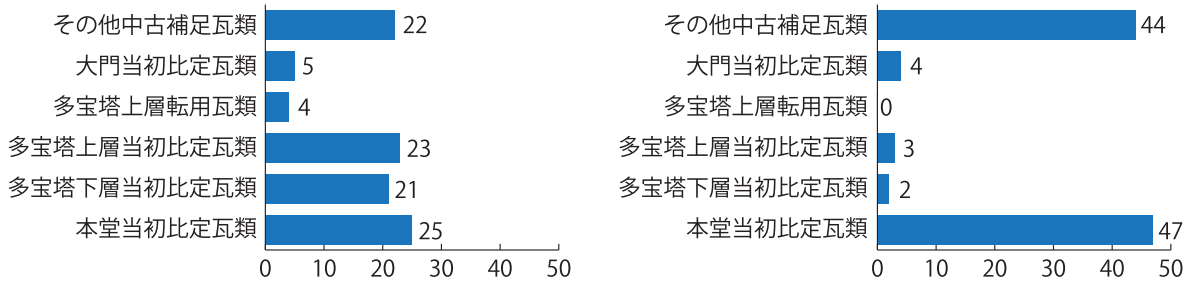
②①より大振りな平瓦（本堂所用瓦と同種）は 350 枚（中世期平瓦全体の 25%）、小振りな平瓦（多宝塔下層・上層所用瓦類と同種）は 840 枚（同 60%）、と大半を占める。

③①より大振りな丸瓦（本堂所用瓦と同種）は 210 本（中世期丸瓦全体の 47%）、小振りな丸瓦（多宝塔下層所用瓦と同種）は 110 本（同 25%）、と大半を占める。



上：大門所用の中世期平瓦のうち、主要２種の寸法比較（左：多宝塔下層所用瓦、右：本堂所用瓦）
下：大門西面での平瓦葺き（丸瓦解体時）の状況（上写真の大小平瓦を同列で併用して葺いていた）

表１　長保寺大門での中世期屋根瓦の構成内訳（左：平瓦、右：丸瓦、単位%）



（註）表中で「瓦類」としているのは、軒瓦に対応するものに加えて、それらと同等と判断されたものを含めていることを表す。

以上の結果から、建立時の大門屋根では、軒瓦や鬼瓦などの役物瓦程度は製作されたが、平葺きには本堂や多宝塔の建立時の平瓦や丸瓦（の残り）が多用された可能性が考えられた。

7.（調査 4）長保寺伽藍における中世期瓦と周辺地域との関係

ここまでは文化財建造物の保存修理事業で主に実施される瓦調査内容を紹介して来たが、今回の修理ではもう一歩踏み込んで、長保寺伽藍における中世期、とりわけ南北朝期の瓦の製作状況と使用状況を考察し、その点からも先の調査内容を補完できた。その過程を簡単にだが紹介する。

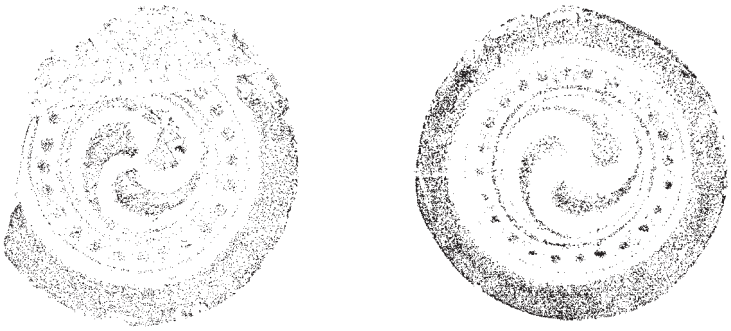
まず、心柱墨書により建立年代が明確な多宝塔について、建立時の瓦類の組合せを構成員数や寸法、瓦当文様、技法、胎土などから比定を試みた結果、次の２組の組み合わせが推定できた（次頁右写真上･中）。

①：軒丸瓦「三ッ巴 29」－軒平瓦「連珠文 16」
②：軒丸瓦「三ッ巴 27」－軒平瓦「連珠文 13」

この 2 組の瓦類は同時期の製作と判断でき、また、本堂建立時の比定瓦類とも技法的に近似する。

次に、昭和修理で下層に移設された上層所用の隅軒丸瓦は、有田川町所在の薬王寺観音堂（貞和 3 年・1347）の当初比定軒丸瓦と同じ笵と判明し、瓦当面の状態（笵傷の有無）から長保寺多宝塔が後作と考えられた（下写真）。この瓦当文様は、外区に圏線が付き、②の軒丸瓦「三ッ巴 27」と合わせて古式であった。

①軒丸瓦「三ッ巴 29」と軒平瓦「連珠文 16」の組み合わせ


薬王寺観音堂の当初比定軒丸瓦（左）と長保寺多宝塔上層の当初比定隅軒丸瓦（右）の瓦当面比較

②軒丸瓦「三ッ巴 27」と軒平瓦「連珠文 13」の組み合わせ

そして、上層で大半を占める中世期平瓦・丸瓦と対応する軒平瓦「宝珠唐草文」と軒丸瓦「三ッ巴 24」は、上記のいずれの瓦類よりも古い（右写真下）。

以上から、正平 12 年（1357）に建立された多宝塔の屋根には、下層用に軒平瓦「連珠文 16」－軒丸瓦「三ッ巴 29」とそれに伴う平瓦・丸瓦が新調されて、上層では軒平瓦「宝珠唐草文」－軒丸瓦「三ッ巴 24」とそれに伴う平瓦・丸瓦を転用し、不足分は軒平瓦「連珠文 13」－軒丸瓦「三ッ巴 27」とそれに伴う平瓦･丸瓦、薬王寺観音堂と同笵の隅軒丸瓦などで補った、と想定できた。

軒丸瓦「三ッ巴 24」と軒平瓦「宝珠唐草文」の組み合わせ

多宝塔と同様に、大門でも寸法や技法から建立当初と比定した軒平瓦について、瓦当文様、技法、胎土などの面から検証を行った。軒平瓦の顎の形状（瓦当接合時の補足粘土の付け方）は、多宝塔の当初比定軒平瓦や道成寺本堂（天授 4・1378）の当初比定軒平瓦と似るが、瓦当下縁に面取りが

施されており、1390 年頃よりも遡らない技法を有していた。軒丸瓦では、本堂や多宝塔の当初比定瓦と比べて、玉縁傍の面取りが肩（胴部）に及ぶ一連のものとなる点、玉縁先の調整が丁寧になる点、胴部側縁の面取りが大きくなる点など、調整方法の違いが確認できた（右図）。

大門：軒丸瓦「三ッ巴 32」と
軒平瓦「連珠文 10」の組み合わせ

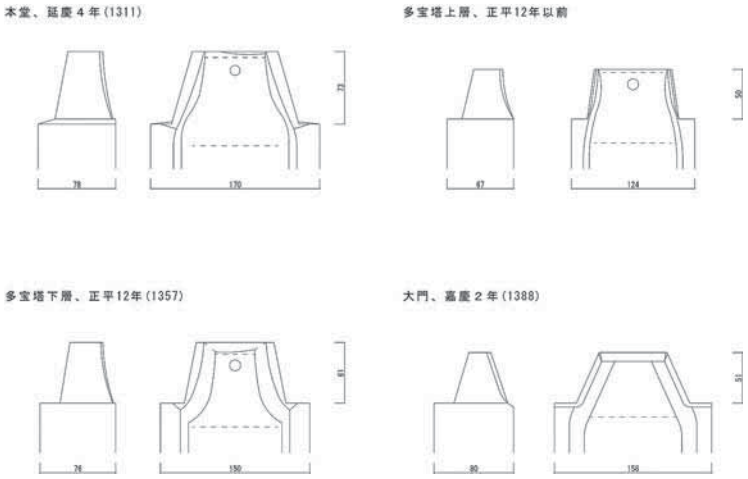


図２　長保寺各建物の当初比定丸瓦の凹面調整方法の比較

8. おわりに

今回の多宝塔と大門の中世期瓦類の調査では、南北朝期の長保寺伽藍造営における瓦の製作および使用状況の全体像を捉えることに成功した（下図）。調査内容については基礎資料となるべく修理工事報告書に可能な限り掲載した。長保寺周辺は埋蔵文化財包蔵地でもあり、また、周辺地域には長保寺の様に中世期の瓦が現役で葺かれている社寺建築も多く存在する。将来の発掘調査や保存修理によって和歌山県内の中世期瓦研究が進むことを期待している。

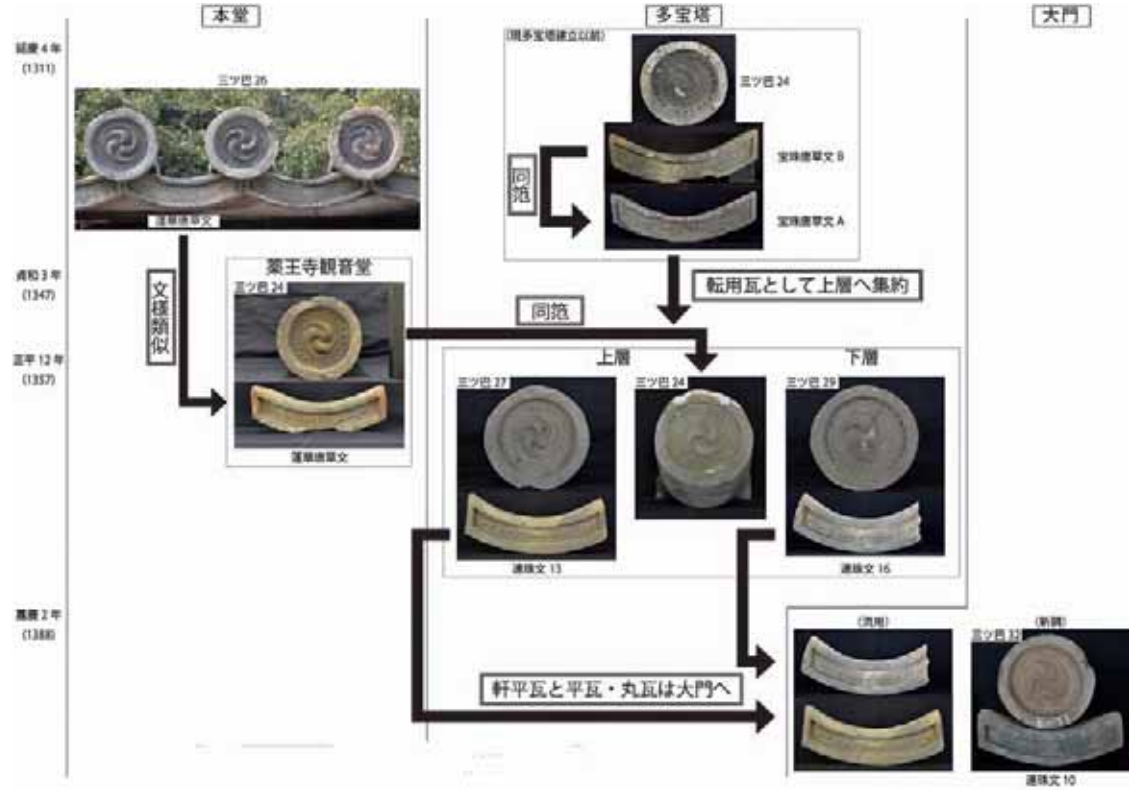


図３　南北朝期の長保寺伽藍造営における各建物での瓦製作および使用状況

史跡和歌山城第 36 次発掘調査

―二の丸大奥・中庭の調査―

公益財団法人　和歌山市文化スポーツ振興財団　北野　隆亮

1. はじめに

史跡和歌山城の発掘調査は 1981 年に行われた一の橋大手門再建工事に伴う調査を手始めに、現在では 34 年目・36 次調査にまで至っており、多くの考古学的な知見が得られ、これまで和歌山城の石垣の修復や御橋廊下などをはじめとする復元整備に役立っている。今回は、二の丸西部（大奥）において、平成 25 年度に行った第 36 次調査の概要を報告する。

調査位置図

2. 調査の成果

発掘調査を実施した和歌山城二の丸西部は、建物配置などを描いた江戸時代後期の絵図「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」が残されており、その絵図をもとに、ある程度遺構を推定しながら調査を進めた。その結果、実際に絵図と合致する大奥中庭の江戸時代後期の遺構などを確認した。遺構は、江戸時代後期の石組池・玉石敷・飛石・植込石積などの庭園施設、中庭を取り囲む建物の礎石・根石・階段台石・石列などを確認し、中庭は絵図に描かれているとおりの池泉回遊式庭園（池を中心に周囲を園路で散策できる庭）であることが明らかとなった。また、絵図が描かれる以前の江戸時代中期の水琴窟や瓦積井戸、江戸時代初期の浅野期石垣の一部なども確認することができた。

3. 主な検出遺構

石組池　石組池は中庭の中央部で確認したもので、東西 16.6 m、南北 7.2 m の規模である。平面形は幅 2.0 ～ 2.5 mの溝が「S」字を描くように造られており、いわゆる心字池（「心」の草書体に似せて造られた池）とみられる。池岸は、景石（庭石）とみられる球形や海蝕を受けた不整形な自然石を組み合わせて石組護岸としており、一部には直径 5 ㎝程度の玉石を密に貼り付けた玉石貼護岸もみられる。

石組池（南西方向から撮影）

石組の主体は砂岩の自然石を用いて

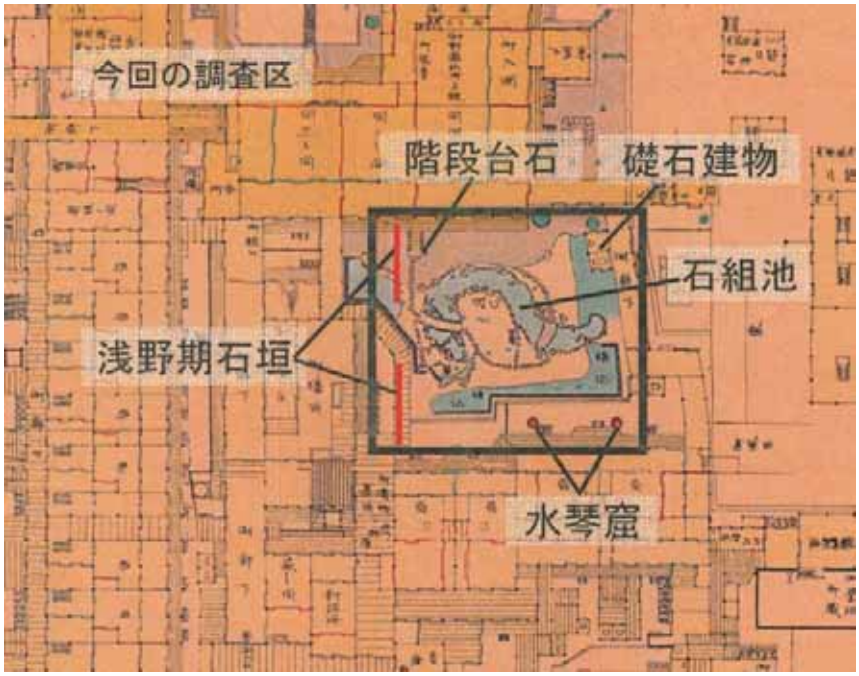
おり、緑色片岩や花崗斑岩などが一部にみられる。池の深さは、浮石などの状況から 20 ㎝程度の浅い水深であったと考えられる。また、橋台石として、北岸に砂岩の切石 1 点、南岸に砂岩の割石 1 点が石組みに組み込まれている。心字池は江戸時代の大名屋敷でよく用いられた形式である。

階段台石　階段台石は、絵図にみえる「御対面所御下段」前の廊下の縁側から中庭に降りる階段を据えるもので、東西幅 130 ㎝、南北長 100 ㎝を測る砂岩の割石を用いている。台石の上面は丁寧に磨かれており、平滑な平坦面となっている。

浅野期石垣　二の丸西部は徳川期に入ってから西堀を埋め立てて拡張したとされる部分であるが、拡張前の西堀石垣（浅野期）を平成 21・22 年度の 2 回の調査で深さ 1.6 m、長さ約 27 m 分を確認している。今回の調査で、その南側延長部分の一部を 2 ヵ所（北側と南側）確認した。北側は、延長 4.2 m、深さ 1.2 mの範囲を確認したが、刻印「丸の内に三つ引」を 4 ヵ所で確認している。南側のものは、延長 7.1 m、深さ 1.1 mの範囲を再確認したものである。これらの石垣は西側に面を持つもので、砂岩の自然石を野面積みにしており、間詰石や裏込石に緑色片岩の割石を用いたものである。

浅野期石垣（西方向から撮影）

浅野期石垣の刻印



史跡和歌山城第 36 次調査（「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」に加筆作成）

弥生時代中期から奈良時代の微高地上の居住域

―和歌山市　和田遺跡の第２次発掘調査―

公益財団法人　和歌山県文化財センター　佐伯　和也

1. はじめに

本調査は秋月海南線道路改良工事に伴う第２次調査として、第１次調査の南側の道路建設予定地を 4,548 ㎡実施した。現地調査は平成 25 年５月 13 日～平成 25 年９月５日である。

和田遺跡は和歌山市和田に所在し、紀ノ川の南岸、和歌山市の南東部に位置する。遺跡の北側には和田川が西流し、これにより形成された沖積地に遺跡は立地する。

周辺の遺跡には、弥生時代を通しての井辺遺跡や神前遺跡が和田川の北方に展開している。とりわけ古墳が目立って多く、北側には県下で最大級の岩瀬千塚古墳群、井辺前山古墳群、森小手穂埴輪窯跡、西には和田古墳群、県下で唯一の陵墓としての竈山古墳や、この竈山古墳に近接して、県下で４例目の琴柱形石製品が出土した坂田遺跡がある。また、今回の調査地の中央には古墳時代を起源とする宮井用水が北から南に流れ、周辺一帯には良好な条里遺構が遺存していることでも知られている。

2. 調査の概要

調査地の現況は水田である。この水田の中央を流れる用水路の東側を１区・２区、西側を３区・４区と呼称し調査を実施した。

１・２区では弥生時代～古墳時代にかかる時期の旧河道を２条検出した。この内の１条は１次調査で検出したものの延長である。この河道は１次・２次調査の状況から判断して東から西に流れ、幅は 30 m以上あるものと推測でき、残存の深さは 0.5 ～ 0.6 mを測る。新たに検出した河道は１・２区のほぼ全域で検出した。幅は両肩を検出できた箇所で 12 ～ 14 mを測り、残存の深さは 0.4 ～ 0.5 mを測る。なお、これら河道を検出するに当り、数本のサブトレンチを設定した。河道より下層は砂層およびシルト層となり、河道以前は全域が湿地状となっていたことが窺える。

３・４区では弥生時代中期の土器廃棄土坑１基、弥生時代後期の井戸状遺構１基、古墳時代の掘立柱建物２棟や土器が埋納された土坑２基、溝状遺構数条、奈良時代の井戸１基を検出した。紙面の関係上、この内主だったものについて簡単に記述する。

調査位置図

写真１　航空写真（南から）

弥生時代中期の土器廃棄土坑の規模は 7.1×7.3 mのほぼ円形を呈する。残存の深さは 0.1 ～ 0.15 mと浅い。この遺構からは弥生時代中期の土器が多量に出土したが、いずれも遺存状況は不良で、器面は全て摩耗している。

古墳時代の掘立柱建物１は桁行３間（4.4 m）× 梁行２間（3.8 m）、掘立柱建物２は桁行４間（5.8 m）× 梁行３間（4.2 m）の２棟を検出した。柱穴は浅く、特に掘立柱建物２の残存の深さは 0.05 ～ 0.12 mである。この状況から、後世にかなり削平をうけていることが窺われる。

古墳時代の土器埋納土坑１は、直径 0.5 mの円形で、残存の深さは 0.37 mを測る。この遺構の底からは須恵器杯身、土師器甕、ミニチュア土器が出土した。土器埋納遺構２の規模は 0.7×1.0 mの楕円形を呈し、残存の深さは 0.23 mを測る。ここからは土師器椀が２個体出土した。

奈良時代の井戸には木製井戸側が遺存していた。掘形は 1.45×1.55 mのほぼ円形を呈し、残存の深さは 1.3 mを測る。井戸側は一本の丸太を縦に２等分し、刳り抜き、それにホゾ穴を穿ち結合している。井戸側の西面には崩壊防止のためか、厚み５㎝の 0.2×1.2 mの板材が添うように立て掛けられていた。井戸側内の底からは土師器の甕や薬壺が出土した。

3. まとめ

今回の調査で検出した遺構の時期は、弥生時代中期・後期、古墳時代、奈良時代である。

遺構を検出するに当たっては、包含層も一部は堆積していたが、殆どの範囲において後世の削平を受け消滅したと考えられ、遺構検出面直上の近代水田層から遺物が出土した。これらの出土遺物には弥生時代から近世までのものが見受けられたが、今回検出した遺構が示す通り弥生時代、古墳時代、奈良（古代）時代のものが目立って多かった。

本調査では調査区の中央に現有の用水路が北から南に流れ、これの東と西では遺構の在り方が大きく異なることが判明した。水路より東側（１区・２区）では弥生時代～古墳時代にかけての旧河道が検出され、西側では（３区・４区）では弥生時代中期の廃棄土坑、弥生時代後期の素掘り井戸、古墳時代の掘立柱建物、土器埋納土坑、奈良時代の井戸といったような直接生活に関わる遺構を検出した。以上、遺構検出の状況から和田遺跡における居住域は、調査地の西側に存する雨霧山（通称薬師山）の裾野から放射状に延びる微高地上に求められると思われる。従って、今回の調査地の西に展開している現在の集落域と大差のないものと考えられる。但し、１次調査では旧河道の東側で中世の井戸を検出しており、本調査地からも黒色土器や瓦器椀などの古代末から中世にかけての遺物が少量であるが出土していることから、中世の時期の集落域は旧流路埋没後、東側の微高地上まで広がっていた公算が高い。

写真２　古墳時代土器埋納土坑１

写真３　奈良時代の井戸段割り状況（西から）

井辺遺跡の調査と景観復元

―井辺遺跡第 34 次調査から―

公益財団法人　和歌山市文化スポーツ振興財団　藤藪　勝則・福佐美智子

1. はじめに

井辺遺跡は、紀ノ川の南岸、福飯ヶ峯丘陵の北西に広がる沖積地に位置する。遺跡は、南北約 0.5 ㎞、東西約 1.0 ㎞の範囲に広がるもので、これまでの調査によって遺跡の東部や福飯ヶ峯北西麓において、弥生時代後期から古墳時代前期の住居や井戸、墓、自然流路などが見つかり、遺跡の盛行期における遺構分布や自然地形について少しずつ明らかとなりつつある。

写真１　調査地遠景（南から）

2. 調査の成果

今回の調査は、松島本渡線市道建設に伴う発掘調査であり、平成 24 年度から継続的に井辺遺跡の発掘調査を実施している。調査地は、今まで調査歴がない遺跡中央から西半部に位置し、地形的には現在広範囲に水田が営まれている微低地内に位置する。調査区は、この遺跡範囲のうち微低地を南北に縦断するように設定されており、調査では当時の人々が自然地形を巧みに利用し暮らしていた痕跡を多数確認することができた（写真１）。

特筆するべきものには、縄文時代晩期後半の土器棺墓（土器を棺として使ったお墓）や、弥生時代後期末から古墳時代前期の集落（掘立柱建物、溝など）、米を作った古墳時代前期の水田などがある。

縄文時代晩期後半の調査地周辺は、幅約 40 m以上を測る北東から南西に細長くのびる自然堤防状の高まりを利用し、人々が生活を営んでいた状況が確認された。縄文時代晩期後半の土器棺墓は、煮炊きに使う土器（深鉢）を棺として穴に埋設するもので、この穴の大きさは直径 50 ㎝程度である（写真２）。井辺遺跡の周辺では、調査地から北東 1.5 ㎞の花山丘陵西側にある鳴神貝塚隣接地（鳴神Ⅳ遺跡）で縄文時代晩期中頃の墓が発見され、また、南東に約 500 m離れた岡崎縄文遺跡では、縄文時代後期から晩期頃の汽水性の貝殻を多数含む貝塚が見つかっている。井辺遺跡では縄文時代晩期の遺構が検出されたのは今回の調査が初めてである。

縄文時代晩期の遺構が鳴神貝塚や岡崎縄文時代遺跡のように丘陵裾部ではなく、当時の紀ノ川河口に近く微低地にあたる今回の調査地で見つかったことは、縄文時代晩期における海岸線や河口部における微地形の成り立ちを考えるうえでも重要な発見と言える。

写真２　縄文時代土器棺墓

弥生時代後期末から古墳時代前期の調査地周辺は、前述した北東から南西に細長くのびる自然堤防状の微高地と、その周囲に微低地が広がる地形環境であり、微低地は縄文時代晩期後半から古墳時代前期にかけて水没と堆

積を繰り返し、地表面であった時期には植物が繁茂する環境にあったと考えられる。微高地上には、建物の柱穴に柱材を残す掘立柱建物（写真３）や、炭化材や土器を大量に捨てた穴（写真４）など日常生活の痕跡がみられ、その周囲に広がる微低地との境には集落を区画する溝（写真５）が掘削されおり、また微低地には、米（食料）を生産するための水田とその水田に水をひくための灌漑用水路が掘削されていた状況を確認した。

そのなかで古墳時代の水田は、網目状に広がる畦畔（畦）によって区画された長辺約 5.0 m、短辺約 4.0 mの方形を呈する小さく狭いもので、調査では約 15 区画程度確認している（写真６）。このように小さく区画された水田は、小区画水田と呼称される。この水田の時期は、古墳時代前期のものと考えられ、県内でこのような水田が検出されることはあまりなく、貴重な調査例と言える。

古墳時代前期以降の調査地周辺は、集落形成の地盤であった北東から南西方向にのびる微高地とその周囲に広がる微低地が自然災害で埋没したようである。

そして、紀ノ川南岸平野部を形成するひとつの地域相としてみた場合、調査地周辺は広大な微低地となり、その後、水田耕作地帯となる。この調査地周辺の地形環境の変化は、紀ノ川河口の変動による流水の変化と河川堆積物の変化が影響していると考えられる。

写真３　掘立柱建物の柱材

写真４　炭化材で埋まった土坑

写真５　集落を区画する溝

3. まとめ

井辺遺跡の発掘調査では、埋もれた人間生活の痕跡を調査し記録することに加え、その痕跡が何故そこに残されたのかを地形環境を理解することで明らかにしようとしています。

例えどんなに都市化された現代社会でも、人間生活と自然環境との関わりは、途切れることなく今に続いていることを、遺跡の調査から感じていただければと考えている。

写真６　古墳時代前期の小区画水田（網目部分）

田屋遺跡第 18 次発掘調査成果

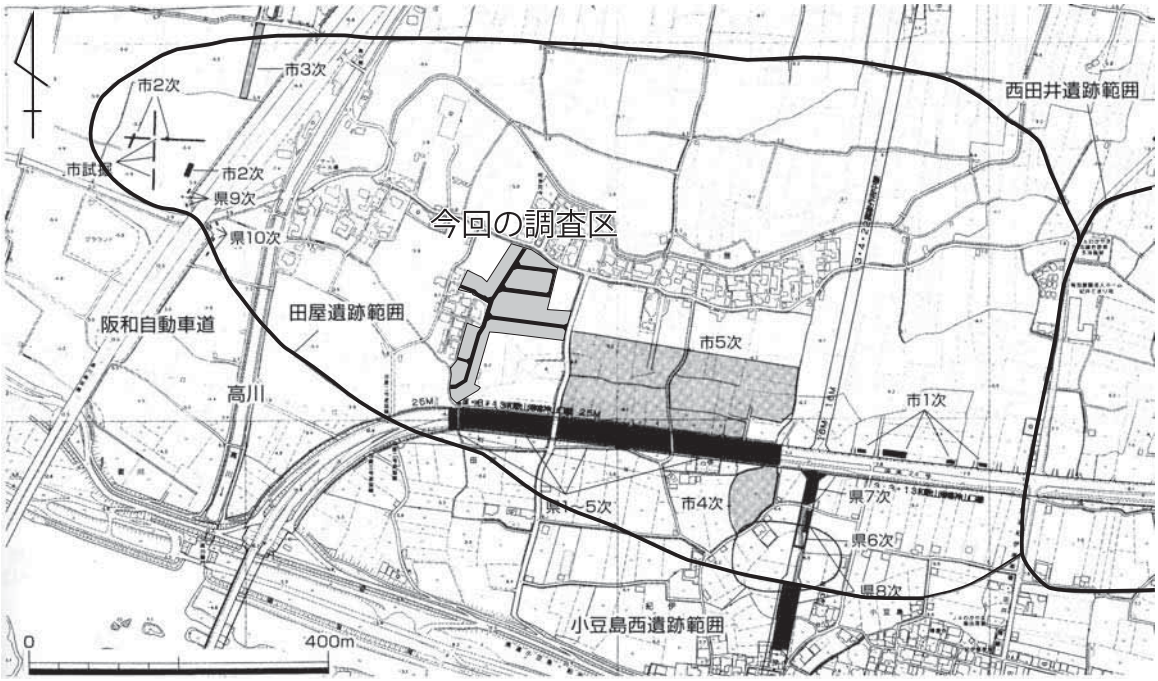
公益財団法人　和歌山市文化スポーツ振興財団　菊井　佳弥

田屋遺跡は、昭和 57 年から行われた一般国道 24 号線（和歌山バイパス）建設に伴う調査で弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物が約 60 棟検出されており、その後の調査でも同時期の竪穴建物が約 20 棟検出されている。弥生時代後期から古墳時代後期にかけての紀ノ川北岸を代表する集落遺跡である（第１図）。

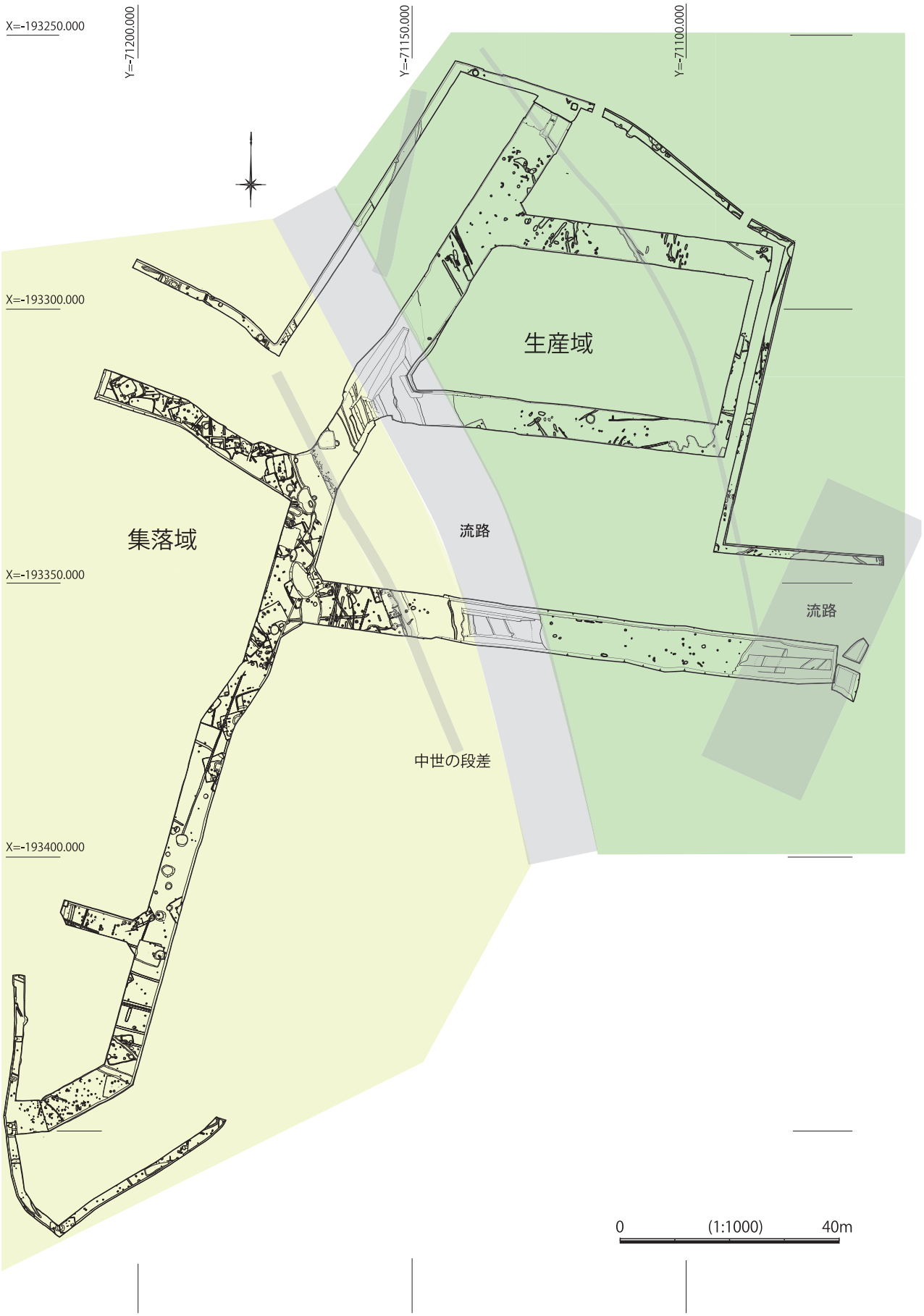
第 18 次調査では、古墳時代前期から後期の竪穴建物を 44 棟と掘立柱建物２棟、古墳時代の溝 8 条と耕作痕、中世の柱穴群と井戸や土坑、耕作痕や杭列を伴う段差を検出した（第２図）。古墳時代の竪穴建物 1 基と掘立柱建物 1 基を除く建物と、中世の柱穴群や井戸は、ともに調査区南西の微高地上に分布し、北西の低地では耕作痕を検出した。集落域と生産域の境には、弥生時代後期まで機能していた埋没流路（NR － 2）があった。古墳時代には旧流路上に幾度かにわたって、溝が掘削され、中世には、旧流路の南岸に段差を設け、杭を打ち境界としていた。

古墳時代前期から後期の 44 棟の竪穴建物は、比較的遺存状態がよく、建物の構造や間取りを検討するのに重要な資料を得た。竪穴建物の掘方は、古墳時代前期が深く、中期以降の掘方は、前期のものと比べ浅い。また竪穴状の掘方ではなく、壁溝や転ばし根太等の据え付け溝掘方のみが検出できるものやベット状遺構と呼ばれる床面が有段となるものがあった。古墳時代中期以降の竪穴建物は、石や高杯を土器台としたカマドや完形の土器が出土した貯蔵穴を有するものがあった。古墳時代中期に、建物全体構造や間取りに大きな変化があったことが今回の調査で確認できた。

今回検出した古墳時代の集落は、流路や耕作地を挟んでおり、一般国道 24 号線（和歌山バイパス）建設に伴う調査で検出された集落と別の集落であり、今後両者の関係を検討していく必要がある。



第１図　田屋遺跡既往調査配置図（1 ／ 10000）



第 2 図　調査区平面図（1 ／ 1000）

山口古墳群における礫石経埋納遺構について

公益財団法人　和歌山県文化財センター　村田　　弘

1. はじめに

山口古墳群は、和泉山脈の南裾部分にあたる箇所に所在しており、今回の調査地点である 10 号墳と考えられていた丘陵頂部で標高約 175 mを測る。この 10 号墳については、試掘調査の結果、古墳ではなく自然地形であることが判明したが、この試掘調査で礫石経が多く見つかったことから本調査を実施する運びとなったものである。

2. 調査の成果

調査区頂部の試掘調査で一字一石が集中して見つかっていた箇所において、遺構精査をおこなった結果、直径 60 ㎝、高さ 15 ㎝ほどの土饅頭状に礫石経が積み上げられ置かれている遺構を検出した。用いられて石は２～４㎝大の扁平な川原石で、現地で確認する限りは大部分に経文の一字と思われる漢字が墨書されていた。

据え置かれた地盤は軟質の岩盤で、この岩盤を掘り抜き賢瓶などが埋められていた痕跡はまったく検出されなかった。検出された状況が土饅頭状に盛り上がっており、比較的当時の現況を保っていると考えられることから、露出していたものではなく、土饅頭に築いた後、土を被せていたものと思われ、おそらく当初にはその傍らに木標や石碑などの地上標識が設置されていたものと推定される。検出された場所が頂部の南側で、平野部を眺望するに適した箇所であったことを考えると、あえてこの箇所を選定し埋納したことが窺えると言えよう。

3. まとめ

この遺構の時期については明確にし難い状況であるが、全国の類例や県内の傾向から推して江戸時代のものと考えるのが妥当と思われる。

その造営目的や主体者についても現段階では不明といわざるを得ないが、当地が修験道のルートに当たっていることからその関連の可能性も考えられよう。それとともに近世にはいるとこうした仏教的作善業の勧進として六十六部、いわゆる廻国聖が深く介在した例が知られており、その可能性も視野にいれておく必要があるものと思われる。

礫石経検出状況

礫　石　経

根来寺遺跡の発掘調査

公益財団法人　和歌山県文化財センター　寺西　朗平

1. はじめに

調査地は蓮華谷川上流、東岸の急斜面上にあるわずかな広さの平坦地であり、川沿いに延びる狭小な谷を眼下に見下ろす位置となる。

今回の調査で検出された遺構は石垣､排水溝等である。石垣は谷側の絶壁に沿って築かれていたが、これは建物の土台として一定の広さの敷地を確保し、且つその地盤を強固にするためとみられるもので、その石尻と岩盤の間には大きさ 20 ㎝程度の片岩礫を詰めて栗石としていた。また山側は岩盤の露頭であり、当地の造成は斜面の岩盤を掘削したことによる。更にその山側斜面の裾には排水溝が設けられ、敷地内の排水については周到に整備されたことが窺える。

長い年月の経過により、調査地には多量の礫・土砂が堆積し、また谷側の崖には崩落箇所が目立った。石垣をはじめとする遺構の残存状態も決していいものではなかったものの、このことは却って当該地点の立地条件の厳しさをよく示すものといえ、石垣や排水溝はそのことをよく把握した上で構築されたものと考えられる。

2. 調査の成果

石垣は 2 ～ 4 段が残存していた。裏込めとしての栗石はこの場所の造成に伴って生じた砕石である可能性が高く、このような片理に沿って割れた礫を詰め込むことは石垣背面に多数の間隙をつくることになり、排水には有効であったものと推定される。石垣は断崖に面した敷地の南側及び西側のほか、東側にも構築されており、この東側に設けられた石垣は斜面裾に巡らせた排水溝の側壁をも兼ねていた。この排水溝の底は岩盤で、一部の表面は滑らかに削られており、斜面上方から流れ込んだ水は速やかに外部へ放出されたものとみられる。また結晶片岩のやや平たく不定形な石を隣の石へと持ち掛けるように並べてその蓋としていたが、これは斜面を伝ってきた水がその蓋石の隙間から溝内へと導かれる構造で、間隙が多く一見乱雑にも見えるこの排水溝の蓋は、斜面上方から流れ込む多量の雨水を漏らさず溝に流し込むよう想定したものであると考えられる。

遺物は軒丸瓦、白磁片、陶器片、土師質皿等があり、敷地内を整地したとみられる土の表面上（遺構検出面）や、排水溝の埋土中から出土した。いずれも時期は 16 世紀末頃のもので、羽柴秀吉による紀州攻めにより根来寺が衰退した頃の年代に近い。

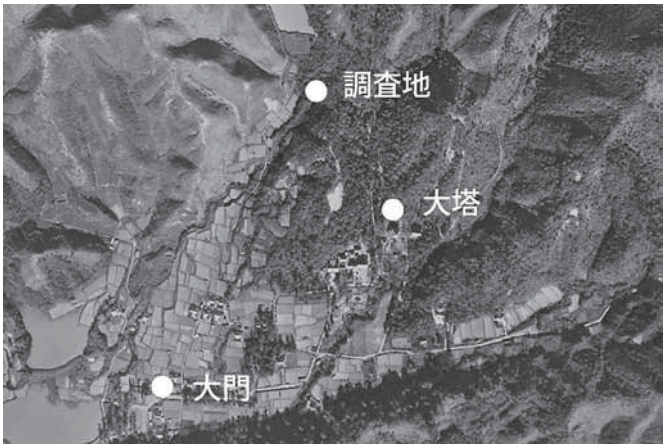


写真 1　根来寺遺跡空中写真（国土地理院）

3. まとめ

今回の調査で検出された遺構は急斜面の途中にある平坦地に検出されたものであるが、当該調査区は現在の根来寺奥の院から北西へ 100 m程度の距離にあって、根来寺の中心部から近い位置にあるといえる。

平成 23 年度に西側の隣接地において実施された発掘調査では敷地区画や石垣、暗渠、古道といった遺構が検出されているが、今回の発掘調査成果は谷部に広がる遺構の状況とも合わせて検討する必要があると考えられる。

写真 2　調査地遠景（西から）

写真 3　石垣（南東から）

写真 4　東側石垣と排水溝（南から）

写真 5　排水溝（北西から）

東渋田遺跡の発掘調査

公益財団法人　和歌山県文化財センター　村田　　弘

1. はじめに

東渋田遺跡は、和歌山県伊都郡かつらぎ町大字東渋田・西渋田・島に所在する。遺跡の範囲は東西 300 m、南北 150 mにおよび、今回の調査地は遺跡のほぼ中央に該当する。調査区は大門橋南口から南へ延びる旧高野街道をはさんで大きく西側地域と東側地域の 2 箇所に分かれる。今回の調査では西側地域を１・２区、東側地域を３～９区と仮称し、全体を４回の工程にわけて調査を実施している。調査面積は、西側部分が約 1,198 ㎡、東側部分が約 719 ㎡、全体で 1,917 ㎡である。

2. 調査の成果

西側地域においてはベースとなる面は砂礫層で、全体に遺構密度は低い状態であった。

これに比べて、東側区域の調査地（3 ～ 9 区）は遺構密度も高く、弥生時代中期前半の竪穴住居を 2 棟のほか溝､土坑などを検出した。ここではこの東側調査区の主要な遺構についてのみ報告する。

溝　330：３区の西端から東へ延び、その後緩やかに屈曲して北方向へと延びる溝である。幅はもっとも広いところで 2.1 m、狭いところで 1.5 mほどを測る。深さは 0.3 mほどである。弥生時代中期前葉と思われる壷の大振りの破片が、溝底部よりわずかに浮いた形でまとまって出土している。この溝については、何かを囲繞するように屈曲していることや時期的なことから方形周溝墓の溝である可能性も考えられよう。

竪穴住居　4026：住居跡の西側の過半分は近世以降の水田化の際に削られており、炉跡も含めて遺存していない。また、北東部はいくつかの撹乱により削り取られている。このため遺存していたのは南東部の 1/4 足らずということになる。わずかに遺った弧の大きさから復元すれば直径 5.5 m前後の規模になるものと推定される。残存する深さは６㎝ほどを測る。埋土は暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト一層であった。

図１　調査区位置図

竪穴住居　809：８区から９区にまたがって検出された竪穴住居である。東側と西側の一部が他の遺構及び撹乱により破壊されているが、ほぼ全容のわかる状態で検出している。それによれば円形の竪穴住居であるが、南北 5.75 m、東西 5.40 mほどで、やや南北に長くなっている。深さは検出面から 0.1 mと残りの悪い状況であった。床面中央やや北側よりで炉跡を検出した。炉は１m弱の円形で、深さは 0.3 m強を測る。最下層には厚さ 6 ㎝ほどの炭層が確認できた。かつらぎ町域では炉の周囲が一段高くなった炉堤を伴うものがいくつか知られているが、この炉については炉堤は 確認できなかった。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代中期前半と思われる遺構・遺物を多く検出することができた。従来、この時期の遺物が出土する遺跡は、かつらぎ町域及びその近隣においては、きわめて少なく、先年実施されたすぐ北側の渋田小学校の発掘調査や紀の川市の名手本陣跡からわずかな出土が確認されている程度である。

その意味では今回の調査で得た資料の意味は大きく、今後周辺域での集落の変遷を考察する上で、貴重な資料を得たものと言えよう。

溝 330（南南東から）

溝 330 土器出土状況（北東から）

竪穴住居 4026（北から）

竪穴住居 809（西から）

地宝のひびき

―和歌山県内文化財調査報告会　資料集―

発行日　平成 26 年 7 月 13 日

発　行　公益財団法人和歌山県文化財センター
〒640-8301　和歌山市岩橋 1263－1
ＴＥＬ：073-472-3710
Email：maizou-1@wabunse.or.jp
ＵＲＬ：http://www.wabunse.or.jp

印　刷　株式会社ウイング

表紙写真：小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡調査区全景